第二部　長崎医科大学　原爆被災復興日誌

長崎医科大学教授
調　来　助

緒　言

本記録は、昭和二十年八月九日米国新兵器による長崎大空襲に端を発し、長崎医科大学、職員、建築物、学生其他の遭難状況並に道尾岩屋倶楽部に開設した長崎医大仮救護所の顚末を記したものである。多数人員の綜合記録でなく、余自身急遽にしたためたものであるから、公私を混淆した所が少くないが、他日本格的の記録を作る際に幾分なりとも役に立てば幸いである。

昭和二十年八月十三日
調　来　助　起稿

この記録は上記の心構えで書き始めたが、事志と違い、八月九日の原爆の日から僅か四日間で一旦中断され、（25頁から50頁まで空白のまま放置）、其後大学本部が大村海軍病院に移された九月二十六日から再び記載されて、十月二十六日に及んでいた。

故に1～25頁迄と、51～98頁までは当時書かれた生々しい日記であるが、25～50頁までは昭和四十五年七月五日から七月二十三日の間に書かれたものである。

（欄外の（）内の数字は原著の頁を表わす。）

はじめに

長崎大学医学部原爆復興50周年医学同窓記念事業会は、被爆犠牲者追悼と原爆被爆の実態および被爆後の復興の歴史資料を後世へ残すことを目指して、①原爆復興50周年記念碑の建設、②原爆被爆・復興関係資料の展示、③医科大学と原爆関係書籍の復刻、④「同窓会だより」特集号の発行、⑤被爆50周年記念冊子の刊行、⑥8月5日開催の記念式・記念講演会・記念同窓会・原爆被爆者遺族懇談会を企画、準備を進めてきました。その過程において「あとがき」に記された経過で、故調　来助名誉教授が被爆後に記された日記の原本が再発見され、8月9日の慰霊祭の場においてご遺族から医学部へ寄贈される手筈が整いました。そこで本日記も復刻事業に加えるとともに慰霊祭へご出席の方々への配布を行うことと致しました。

調　来助先生は、昭和17年3月長崎医科大学教授としてご着任、爾来永く現在の医学部外科学第一教室を主宰され、昭和40年停年によりご退職、同年長崎大学名誉教授の称号を受けられ、平成元年4月15日脳梗塞のため91歳で逝去されました。日記に記されております様に、原爆当日は教授室で被爆されましたが幸いにも無傷、附属医院裏手での、受傷された角尾学長を含めての救護活動に入られ、医専1年在学中のご次男のご不幸にもかかわらず13日からは滑石に仮救護所を開設しての活動を続けられ、ご自身の原爆症も克服されて医科大学の復興に貢献されました。昭和30年10月原爆10周年記念出版委員会により刊行された「追憶」には「原爆遭難記」と「原爆当時の調外科追想」を執筆されています。

長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会にあっては、教授ご在職中は表立ってはとのお立場があったものの実質的には41年からは会長として、犠牲学徒の靖国神社合祀・遺族援護法の適用の請願に尽力され、共にいずれもその実現に至りました。現在記念講堂ロビーの壁面に嵌め込まれている原爆犠牲者892名の銅板名碑は、先生ご自身が真鍮板に書かれたものを彫刻家松岡国一氏が刻まれたもので、昭和42年8月9日に慰霊碑の前で除幕され、常時は医学部長室に保存された後44年秋に永久安置に至ったものであります。除幕についで、名碑建設記念事業の一端として原爆思い出の手記集「忘れな草」の編集に着手され、43年4月に1号の刊行に至っておられます。さらに44年2月、45年3月、46年12月、49年5月にはそれぞれ2―5号を、52年8月には33回忌記念手記集としての6号、60年9月原爆被爆40周年記念の7号を刊行して来られました。これらはすべてお一人で編集・校正されてきましたとのことで、そのご努力に頭の下がる思いを致しております。これらの貴重刊行物はすべて今回復刻することとしております。

本復刻版に添えて調　来助先生のご功績の一端に触れました。

遺族代表　内藤達郎　記

長崎大空襲

一、爆撃前後の状況

【八月九日】

昭和二十年八月九日、此日は長崎市にとって永久に記憶さるべき大惨禍の日である。

此日、余は昨八日正午よりの防空当直で病院に宿泊し、八日夜は幸に無事に過したが、八日は大詔奉戴日ではあり、欠席の高瀬隊長に代り、特に厳重に警戒する様当番学生にも申渡した。

九日朝七時教官達（木戸助教授、梅田教授、内藤（達）教授、杉浦薬専教授、調）は調理所二階で朝食を済し、雑談の後余は一時自室に引取り、学生の知せにより八時病院玄関に出て朝の点呼を行った。警報は六時半頃警戒警報。七時過空襲警報となり、九時解除、十時迄医専三年の講義を第二中講堂で行い、自室に帰って徳永等君の論文を書き初めた。講義からの帰りに中講堂を見ると十時過ぎなのに、角尾学長は熱心に講義の最中であった。

論文書きの最中唯ならぬ爆音が聞え出したので、空襲警報は解除になって居たが、確かに敵機と判断し、即座に立上って白衣を洋服と着替え、取るものも取り敢ず先づ待避せんと部屋を出かかった。其時北に面した入口の「ドア」でピカッと薄紫の光が光ったと思うとドドドッと物のこわれる音、咄嗟に蝦形にうづくまった。背中に物が落ちかかり、眼前は真暗となって身体中埋まってしまった。ザーッと大雨の降り注ぐ様な音、これは噴き上げた土砂の落ちる音ででもあったろう。ややあって音も静かになったので立ち上ろうと試みた。背中の物は案外に軽い。うまく立上ることが出来た。目を開けたが、真の闇で何一つ見えない。再びしゃがんで四囲の静まるのを待った。此間の感慨、何とも云えない。地獄の真中に自分一人が取残された様な感じだった。

再び立上がった。夜明けの様に漸次明くなった。今だ、と思ってとび出そうとしたが、先づ部屋中を見まわした。今迄書きものをしていた机は前に傾き、カード整理函は倒れ、ベッドはゆがみ、衝立て、椅子等何一つ満足なものはない。天井は落ちて此等の調度品の上に覆いかぶさっている。

机の前に行ってみた。日記帳がちぎれて散乱している。取上げてポケットに入れた。カバンは見当らない。其他机上の原稿、時計、等もどうなったかさっぱり分らない。

逃げ遅れて又爆撃されてはとの気が先に立って、大急ぎで部屋を出た。廊下、階段なども落下物で雑然としている。然し幸に難なく通れた。

東の出口からとび出した。其処に二、三日前に手術した虫垂炎の女の患者が男に助けられてふらふらしながら立っていた。そして大声に救を求めて居た。見ると何処にも怪我はない。「大丈夫だ、早く逃げなさい」と叫んで横穴防空壕の方に走った。汽罐庫はつぶれて中でシュウシュウと蒸気のもれる音がする。

走って行く中、古屋野教授と出会った。額に二條の切創らしいものがある。大した事はない。硝子の破片で傷けたのであろう。長さ二〜三㎝で出血もひどくはない。「御無事で」と挨拶してすれ違い、すぐに横穴にとび込んだ。中を見ると調外科の荒木看護婦が居る、左前腕

に五×三㎝位の切創があり、出血している。すぐに「ハンケチ」を出してくくってやった。

壕を出て本館前に行ったが、人がなだれ出て来てとても入れそうにない。引返して裏山に登った。自分は幸にかすり傷一つ受けて居ない。知人をさがして走った。

初めに調外科の佐藤克己君（仮卒業の配属学生）、佐藤看護婦に会った。佐藤君は杖はついているが怪我はないらしい。佐藤は顔中血だらけで、臀部も衣物が裂けて傷がある様だ。歩けるのは歩ける、早く山上へ行く様に命じてテニスコートの中を横に先刻出て来た自室に行ってみようとした。

其処で長谷川教授に会った。右眉の内端に碗豆大の挫創があり、少し出血している。「大丈夫だから、おさえていらっしゃい。其処は大丈夫だから座っていらっしゃい」と云いながら尚走った。すると石崎助教授（古屋野外科）が這いながら顔一面に火傷を負ってやって来た。「調先生」と悲しそうな声でよぶ。前腕から手にかけても靡爛がひどく一面に表皮が破れ落ちている。「君何処に居たんだ」と聞くと「自分の部屋に居ました」と力なく答える。「よしよし、大したことはないから、長谷川先生の所で休んでお出で」と叫びながら尚東病棟に向って走る中、木戸君が元気な笑顔で上がって来た。頭に少しの怪我がある丈らしい。「よかったな」と互いに無事を喜び合って居ると、「調先生」と泣きながら村山婦長が駆け上がって来た。顔面、前腕に火傷がある様だが石崎君程はひどくないらしい。「やあ、よかったよかった、皆で一緒に上の方へ行こう」木戸君から調外科の看護婦は皆無事との報を聞いて安堵したので、最早自室にも用はないと村山を助けながら丘を小走りに上って行った。

病院も町家でも倒壊した木造家屋の材木に火がついたらしく、四面煙に包まれて丁度靄の中にいる様だ。昨日迄青かった地面は禿山となり、上の感化院跡の建物も全壊して最早一部には火を発して居る。救を求める声、わめく声、友を呼ぶ声、等々あたりは阿鼻叫喚の巷と化して地獄の絵図でも見る様だ。風は下から山上へ向って吹き、灰色の煙がもうもうと山を覆って人なだれを上へ上へと押し上げる。

感化院跡附近を上って居る頃、右手に当って自分の名を呼ぶ声がした。角尾学長が負傷されて山へ上って来て居られるらしい。村山達にはずんずん先へ行く様命じながら、山を横切り崖をとび下りつつ声をたよりに一さんに走った。学長はとみると顔は蒼白でシャツを鮮血に染ましながら力なく仰臥され、周囲に前田婦長、筬島助教授、高橋君等が不安な顔して立って居た。駆けよって「怪我は何処ですか」と聞くと「うん、左手と左足を少しやられた」との答だ、声に力がない。「しっかりして下さい」と云うと「大丈夫だ」と答えられる。左大腿の創は硝子破片による切創で、少し出血して居るので、手当りの三角巾で包帯してやった。シャツは如何にも気持ち悪そうだったので、自分の「ノータイ」をぬいで素早く着せ替えてやった。

煙は次第に勢をたくましくして、今にも火で包まれそうになる。坂本町方面では既に火の手が上って「ボウボウ」「パチパチ」と云う焼音が手に取る様に聞えて来る。其侭ではとても居られぬので、高橋君に学長を背負わせ、自分が道案内となって山を上り初めた。学長の顔は益々蒼く、時々吐気を催し嘔吐が来た。御自分では「動くと脳貧血が来て吐き度くなる」と云って時々静かに憩いながら上って来られる。

感化院跡は既に火を発して通るのに困難を覚えた。道々で「先生診て下さい」と袖にすがる負傷者が数限りなく、見るだに痛ましい姿を

して居る。中には丸裸のものもあり、着て居る着物もずたずたに破れて形ばかりに纏って居るものもある。火傷で全身焼けただれて居るものもあり、全身鮮血で色どられて居るものも居る。力なく横わって居るもの、よろよろとよろめき歩くもの、友を助けて励ましながら登るもの、など目を覆わずには居られない様な悲惨な光景が其処にも此処にも展開されて居る。此世の地獄とは全く此様なのを云うのであろう。

漸うにして琴平山の中腹にたどりついた。一面の薩摩芋畑は葉がとび茎がちぎれて丸裸になっている。畑の中に学長を寝かした。幸い何処にあったのか蒲団が一枚あったのでそれを着せかけた。風が強くて寒そうだ。大倉君が元気でやって来て芋の「つる」で擬装をして呉れた。

この頃風が変って山から下の方へ吹き出した。煙が来なくなって下界の景色が手にとる様に見える。病院でも看護婦寄宿舎、病院廊下、基礎の本館など皆メラメラと火に包まれて盛んに燃えて居る。太陽は赤褐色のいやな色で彩られ、人の顔も夕焼に染んだ様な黒ずんだ灰赤色を呈して居る。

誰かが救急袋を持って来た。中に沃丁の「アンプレ」があったので学長の処置をすることとした。頭に二ケ所、左大腿に四ケ所と小さな傷が無数にある。痛いのを我慢して貰って沃丁を創全部に塗布した。左臀部の三×五㎝位の創には土砂様の汚物がついていた。これは「リヴァノール」液で清洗した。気分は次第によくなられて最早嘔吐は来なくなった。手の傷は硝子による切創で手背に二ツ（一・五×〇・五㎝位）、中指基節背側に一ツ、一ノ瀬君が赤丁で消毒して居たので其侭にした。

風が又変って山の上に吹き上げて来た。時雨みたいな雨も降り出した。大した事もない。山上の負傷者は雨と風とで皆寒そうにふるえて居る。自分は暇を盗んで谷を越え向うの山へ弘治の行方を探しに出かけた。谷に降りがけに白い病院の蒲団にくるまった石崎君が死んだ様になって横わっている。一人では運ぶことも出来ない。谷の陰には調外科の入院患者が無傷で逃れて夫婦が雨宿りして居た。声をかけると嬉しそうに挨拶して煙草を五本程呉れた。「弘治」の名を呼びながら精神科裏の山迄行ったが何の返事もない。大方講堂の下敷となって其侭焼け死んだ事であろう。

道々には手もつけられない様な重傷者が何人となく畑の中や道傍に横わって居る。声を出す元気もないものが多い。学部四年の奥君らしいのが崖下に横わり、失神して呼んでも判らない、草からたれる雨だれが顔中に落ちかかっても払おうともしない。もう間もなく駄目かも知れない。医専三年の上野君は頭に包帯して、いつも程の元気がないが、それでも甲斐甲斐しく友達の介抱をして居た。調外科の日高君は無傷で弘治探しに協力して呉れたが矢張り駄目であった。

やがて学長の居る峯で自分の名を呼ぶ声がした。「永井先生の出血が止らないから来て下さい」と云う。走って帰った。永井君は右耳前部に示指頭大の切創があり、それからの出血が甚しくてレントゲン科の助手が二人がかりで止血に努めて居たが駄目らしい。コッヘルが幾本となく垂れ下って居る。麻酔なしの手術に顔色一つ変えない永井君は洵に神々しい様な気高い気がした。代わってコッヘルを使ってみたが矢張り駄目だ、仕方なく創内にタンポンを強くつめて其上から縫合した。これで漸う止った様である。手術がすむと、レントゲンの助手は看護婦をつれて山を下り向うの崖下に夜寝るための小屋を作り初めた。永井君はクリスチャン丈に丁度「キリスト」が聖教徒をつれて巡

礼する時の様な感じだった。

学長の所に帰ってみると学長は静かに寝たまま何も云われない。誰か氷のかけらを南瓜の破り皿に入れて持って来て学長にすすめて居た。学長も喉がかわくと見えて美味しそうに食べて居られた。

午后四時頃だったか、医専三年の香田君が高木教授を負って山に登って来た。何処にも怪我はないらしいが、顔色が悪く気力が全くないらしい。聞けば自室に居て家が倒壊し幸にして天井を破って逃れ出てグラウンドを通って天主堂の方へ行ったが川べりで力が抜け歩けなくなった所を香田君に助けられたのだと云う。学長の横に寝かして一応診察したが創も骨折もなく、打撲傷さえも判然しない。胸部にも腹部にも別段の所見はない。唯本人は苦しい、苦しいと云う丈である。脈は早く且つ小さい。「ショック」によるものと思った。

続いて薬専の清木君が真裸になり杖をつきながら山を登って来た。話によると壕掘りの最中に爆発し、幸に壕の中で一休みして居た時なので難を免れたが、上から材木など落下して腰を強打したとの事である。作業中だったので猿又一つはいたのみで何にも着て居なく火傷を受けなかったのが未だしも不幸中の幸であった。

夕方江上君と川本君（薬局）が元気に正装してやって来た。二人共滑石の自宅に居たとの事である。火中を通り抜けながら漸くやって来たと云う。救護材料を持って来て二、三治療して居たが其中又姿が見えなくなった。

雨も止み、あたりは夕靄に包まれ初めた。風も少し凪ぎた様だ。下界は火事が益々猛烈となる。夜に入るにつれて火の赤さが益して見ゆる限りは火の海だ。琴平山を越すものもとだえ、山で野宿するものも大体一定の位置に落ちついた。山に登っては来たが、其侭早や天国に

(7)

昇天したものも少くないらしい。感化院跡で山羊がつぶされ悲しげにないていたが、夕方にはどうして出たのか二匹の白山羊が餌さをあさって居た。

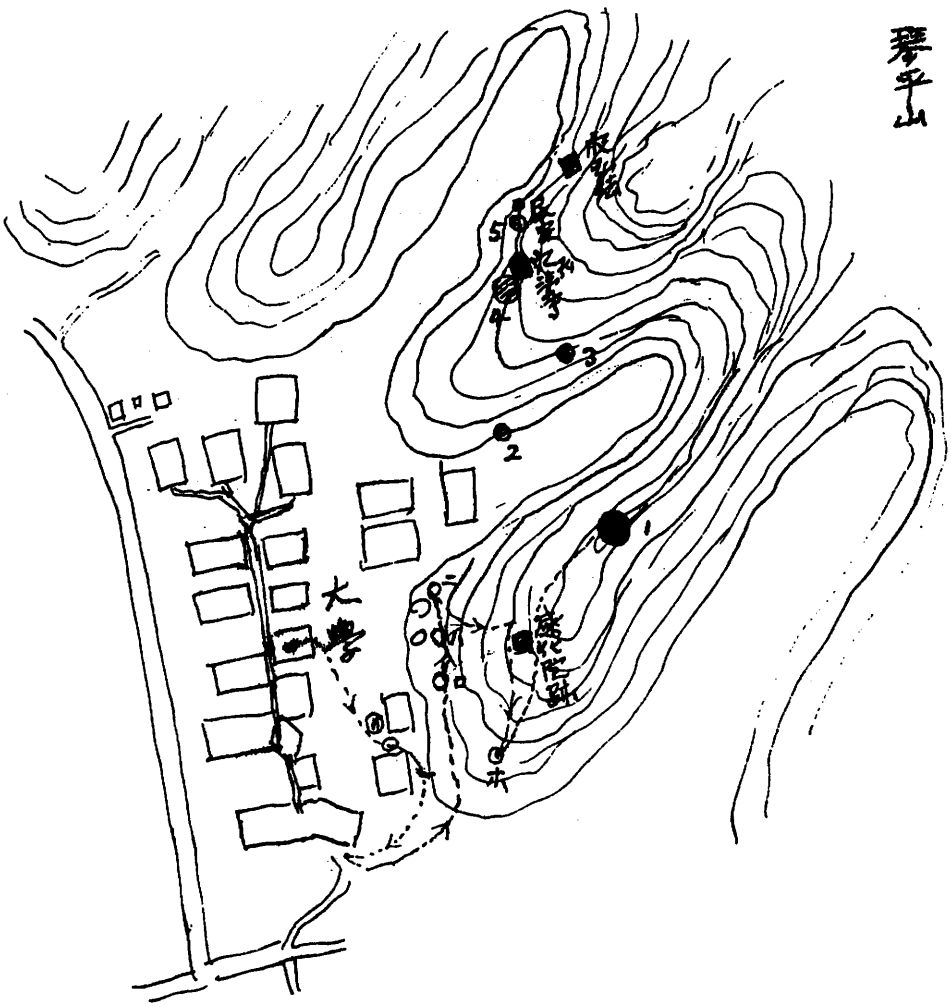
学長、高木教授其他は其位置に横臥された侭一夜を明すこととなり、学内関係者及一般負傷者の一部が其周囲にたむろした。其他点々と一塊りとなって互に励ましあって居る所もある。永井助教授等は下の方の崖下の小屋に、皮膚科の光島婦長等の一行は穴弘法寺の右下方の畑の中に、看護婦の一団は穴弘法寺の前庭に、学生及看護婦を集めた一群は穴弘法寺と穴弘法との中間の倒壊民家の庭に集って、家主の許可を得、米、たくあんなど掘出して炊事をして居た。

自分は夜に入って各宿所を見廻わり、救護本部から持って来た乾パンを分配し、最後の民家迄行くと、二～三町離れた所に祖父江教授が一人で居られる由を聞き、名を呼びながら之を求めて肩に手をかけ民家の学生達の所迄連れて来た。

帰りには白米をたき、おむすびを沢山作り、たくあんを添えて安東（学部四年）君と共に之をくばりながら、学長の所へ引き返して分配した。学長も大変美味しそうに一つ二つ食べられたので安心した。自分は午后に入って少なからず空腹を感じたので畑の薩摩芋を掘っては食べながら山をあちこちに駈け廻ったが、夜のおにぎり四、五個を平らげて大いに満腹した。安東君の功はたいしたものである。而も夕方其処を通って居た三菱挺身隊の女五人程に加勢をたのみ、此女達も嬉々として之に協力して立働いて居たのは特筆に値する。

之で夕食の配給も一段落を告げたので、助教授達を1、と2、の中間谷蔭に集め、火をたき暖をとりながら明日なすべきことを評議した。大体次の通りである。

(8)



1、学長、高木教授等の一群
2、永井助教授等の仮小屋
3、光島婦長等
4、看護婦達
5、学生達
（祖父江教授）
イ、古屋野教授に会う
ロ、長谷川教授に会う
ハ、石崎助教授
ニ、木戸助教授及村山婦長に会う
ホ、学長に会う

一、朝早く担架二ツを用意し、学長及高木教授を自宅へ運搬すること
二、山に野宿して居る学内職員の名簿を作ること。
三、朝食の炊餐は安東君が受持ってやること
四、連絡係を作って市の救護本部との連絡を図ること
五、古屋野教授にこれらのことを通告すること

等であった。夜も深くなったので一同寝ることとし、自分は永井君の勧めに従ってレントゲン科の急造バラック内の藁の上に身を横えた。

青天井を仰ぎながら静かに今日一日のことを追想すると、全て夢の様である。ピカッと光ると共に世は一瞬にして混乱の巷と化し多数の人が傷つき倒れ、或いは其侭死んでしまった。自分達は漸うして難を逃れ山上へ駆け上って来たが病院も町家も焼けてしまい、帰るべき職場もなくなり、明日からはどうしたらよいのか。今日会った学長、高木教授、古屋野教授、長谷川教授達は別として他の教授達の安否はどうか。弘治（余の次男）は基礎で講義中だったに違いないが、どうしたかしら。逃げ出したとすれば穴弘法の山よりもグラウンドを通って浦上天主堂の裏山の方へ行く方が近いからそれから神学校方面に逃げて呉れたかしら。それから師範学校の裏を通って道尾に行けば先づ大丈夫だろうが、あの道を知って居たかしら、それはそうと兵器へ行ってる精一（長男）はどうしたかしら、うまく助かって呉れたかしら、など頭は走馬燈の様にぐるぐる廻って却々に寝つかれない。

その中敵機が来て道尾方面に一回爆弾を投下した。小さいのらしい。又頭上にも来て空中で爆発する小さな「えたい」の知れぬ爆弾を投下した。後になって聞くとそれは傳単を投下した爆弾だったそうである。時計を自室で焼いてしまったので時刻は分らないが、多分十二時頃から眠ったものと見える。

(10)

二、大学の損害

【八月十日】

明くれば八月十日、一天晴れ渡って一片の雲もない。昨日に引きかえてあたりは静まりかえって居る。永井君達は朝未だほのぐらい中に起き出で、東方に向い整列して朝の行事を初めた。毎朝やるものと見えて全員一斉に声も揃い神々しい気がする。自分も列には加わらなかったが、正座して一同に和した。それがすむと永井君を先頭に隊伍を整えて薬専の横穴壕へ向かって出かけた。

自分は一人で学長達の宿営所に返った。学長は案外元気である。高木教授は相変らず元気がない。学長に自宅へ案内することを話すと「家へ帰っても傷の治療がして貰えないから大学へ行こう」と云われる。担架を待って一同大学へ下ることにした。

其処に調理所の佐藤君が来て、「調理所の米は火を消して助かったが炊出しをやりましょうか」と聞きに来た。よろしく頼む由をつげてやがて誰かが持って来た担架に学長を乗せて山を下った。途中敵機が飛来した時は附近の横穴に待避し谷川の辺で一休みすることとした。自分は一人先に行って適当の待避所を探すこととし其処から全焼した看護婦寄宿舎の方へ降りて行った。

寄宿舎は全く灰燼に帰し木片一つ残って居ない。それから高南の南庭を通って石段を下り調外科の東病棟へ出た。高南も東病棟も勿論焼けて外廓だけが空しく立って居る丈だ。

調外科の南側テレスの所に佐藤克己君が居た。焼け残りの小さなヤ

(11)

(12)

カンに水を入れて「これは機関場のボイラーから滴り落ちるのを集めたのだから大丈夫です」と勧めた。飲んでみると昨日の谷川の水と違って綺麗で美味しかった。

調理所裏の横穴壕の所に来てみると最早佐藤主任が来て、助手と二人で米を洗って居た。佐藤克己君にもそれを手伝う様に命じて東病棟へ引き返した。そして先ず自室に上ってみた。

室内を見ると全部焼け落ちて何一つ残っていない。書棚の本が未だブスブスと燃えていた。自分の損害としては室内にあった蒲団、Brunswick の蓄音機、Londin の腕時計（久野の姉から百円でわけて貰った兄の形見でとても正確だった）、革のかばん（この中には一、五〇〇円余り預けた弘治の貯金通帳が入って居た）。其他私物の図書（自室と図書室とに置いて居たが、日本外科学会雑誌、日本整形外科学会雑誌、外科宝函等はバックナンバーも揃って居て惜しかった。其他内外単行本）、論文の記録、文献等で、時計と貯金通帳は差当りなくて困るものであった。

二階を一巡したが手術場が一部残っている丈で他は全焼して居る。未だあつい。二階を下り裏口から出て基礎教室の方へ向かった。

古屋野外科の横穴の前に古屋野教授が居られたので互に無事を祝し合いながら「学長がやがて此処へ下りて来られるので、暫らくお待ちの上会って戴き度い」旨をつげ婦人科裏を通って進んだ。大きな木が或は折れ或は根こそぎになって倒れて居て行くのに困難を覚えた。裏玄関の所で婦人科病室から抜け出して来たらしい女の負傷者に助けを求められた。全身に火傷や打撲傷を負い、這う様にして歩いて居た。眼科と小児科との間には木が一杯で通り抜けるのに難渋した。両科とも幸にして焼けては居ないらしい。裏門を出て大学の方へ進んだが様

子が変わって居て路が判り難い。

大学の門は横倒しに倒れ、其附近に負傷した学生が二、三人居てよろよろと夢遊病者の様な歩き方をして居る。中に一名は「調君はどうしましたか」と聞く、自分の名票を見て、弘治の行方を心配して呉れてるものと思われる。「どうなったか判らぬ」由をつげて、大学病院の方へ行く様勧めた。

基礎教室は全焼し、中にコンクリート建だった建物が外廓丈、ポツポツと残って居る丈だ。本館の焼け跡をみると、事務官室に屍体が一つある。事務官のかも知れない。法医教室の焼跡をみた。此処でも國房教授の室内に屍体が一つ横わって居る。これも國房教授のだろうと思うと思わず黯然たらざるを得なかった。

次に弘治の講義中だったと云われる解剖階段教室に行ってみた。あとで判ったことだが、自分が見た教室は実習室だったので、中に屍体らしいものも骨らしいものもなく、周囲に三個程の半焼屍体があったのみであった。多分講堂から抜け出してグラウンドの方に行こうとしたものが力尽きて其侭屋外で焼死したものと見える。顔の形は判然しないが体の大さ、足、靴等から弘治ではないことが略々推定出来た。

次にグラウンドに出てみた。石段の下に全身火傷で未だ辛うじて呼吸丈している瀕死体が横わって居た。これも解剖学講堂から出たものかも知れない。外に畑のあたりに点々と四、五個の女の屍体があった。帰ろうとすると、レントゲン科の助手が看護婦の行方を求めてやって来た。聞くと一年生の看護婦四－五名が畑の中をたがやしにやって来て居たとの事である。顔も変わって断定は出来兼ねるが「これが誰それだろう、あれは〇〇君に違いない」などしみじみした口調で云って居た。

それから永井君達が来て居る薬専の壕に行ってみた。看護婦が甲斐甲斐しく炊事の用意をやって居る。この壕は平地を約三mばかり掘り下げ、それから又横にヨの字形に横穴を掘った壕で此中ならば大丈夫であったろうと思われる相当頑強な壕だった。

自分は一人これらの人に別れて大学の壕に行ってみた。薬専も薬理学教室も生化学教室も生理学教室も大講堂も書庫迄全部焼けている。細菌、衛生、本館も同じである。壕は無事に残っている様であったが、其前にある雨天体操場が焼け落ちているので殺風景でとても居られる様な所ではない。それでも誰かの声がして居た様だった。自分はそれが誰かとも見定めずに元の病院の横穴壕へ引返した。

学長は未だ下迄下りて居られないらしい。大声で大学の壕よりも病院の壕に案内する様叫び、美瓊館前を通っていると学生が貯水池前に居て「此横穴の奥に山根先生が居られます」と精神科下の横穴を指した。奥では暗くて何も出来ないから出口迄出す様命じ繃帯交換の用意をして待った。出された山根教授を見ると縞の木綿布で頭を包帯し、両腕にも背中にも傷があるらしい。頭は左側頭部の大きな創で包帯を取ると出血しそうでもあるし、脈拍も頻数微弱でとても本式の治療は出来そうにないので、両上膊の創丈治療し、差当り強心剤の注射を行って古屋野教授の居る病院の壕へ行った。そして山根教授の危篤なる由を告げた。

やがて学長の担架が下りて来て調理所裏の横穴に入れた。此中には既に患者が多数入っていたが、他の壕へ移って貰って学長丈をその壕へ入れた。次で高木教授も降りて来たが、これはどうしても元気がないので、壕に入る前に Lodinon 五十 cc 静注及び同じく五十 cc を飲ましたりした。

壕の中で角尾学長は古屋野教授に学長代理となって萬般の事務を掌握する様依頼され、早速かけつけて来た教務の鬼塚君と共に焼残りの机及び椅子を運んで来て調理所裏に大学本部を急造された。

朝飯は佐藤君の尽力により握り飯の炊出しがあった。其後佐藤君は初めて自宅を検分に行ったらしく、十二時近くに帰って自分に向い憮然と一家全滅の旨を告げた。気の毒の至りだ。やがて有家から来たと云う警防団二十数名が担架を持って来た。自分は山上の患者を一ケ所に集めること、神学校附近で負傷していると云う金子教授を迎えに行く様頼んだ。

そして、どうしたら充分の治療が角尾学長初め負傷学生、看護婦達にしてやられるかを思い廻らした。やがて考えついた事は余の疎開先の滑石に適当の収容所を借り受け、其処へ運んで木戸君初め調外科の医師・看護婦、其他元気な学生を集めたら、材料薬品の幾らかは自分の家に疎開さしてあるので多分出来るだろうと云う事であった。早速古屋野教授に相談し、賛同を得て単身自宅に帰り其交渉に着手することを決定した。時に正午過であったろうか。途中徒歩で自宅についたのは午后三時頃であったと思う。

以上記載した様に大学は一瞬にして灰燼に帰した。病院の方は鉄筋コンクリートなので外廓のみは残って居るが内部は大半焼失したのである。唯小部分のみが焼残ったが其大略は次の如くである。

全焼　病院外来本館　薬局、内科病棟　耳鼻科、南講堂、調外科東病棟、中講堂、古屋野外科手術場、第二中講堂、売店、産婦人科手術場、北講堂、高南、看護婦寄宿舎、美瓊館、裏門門衛

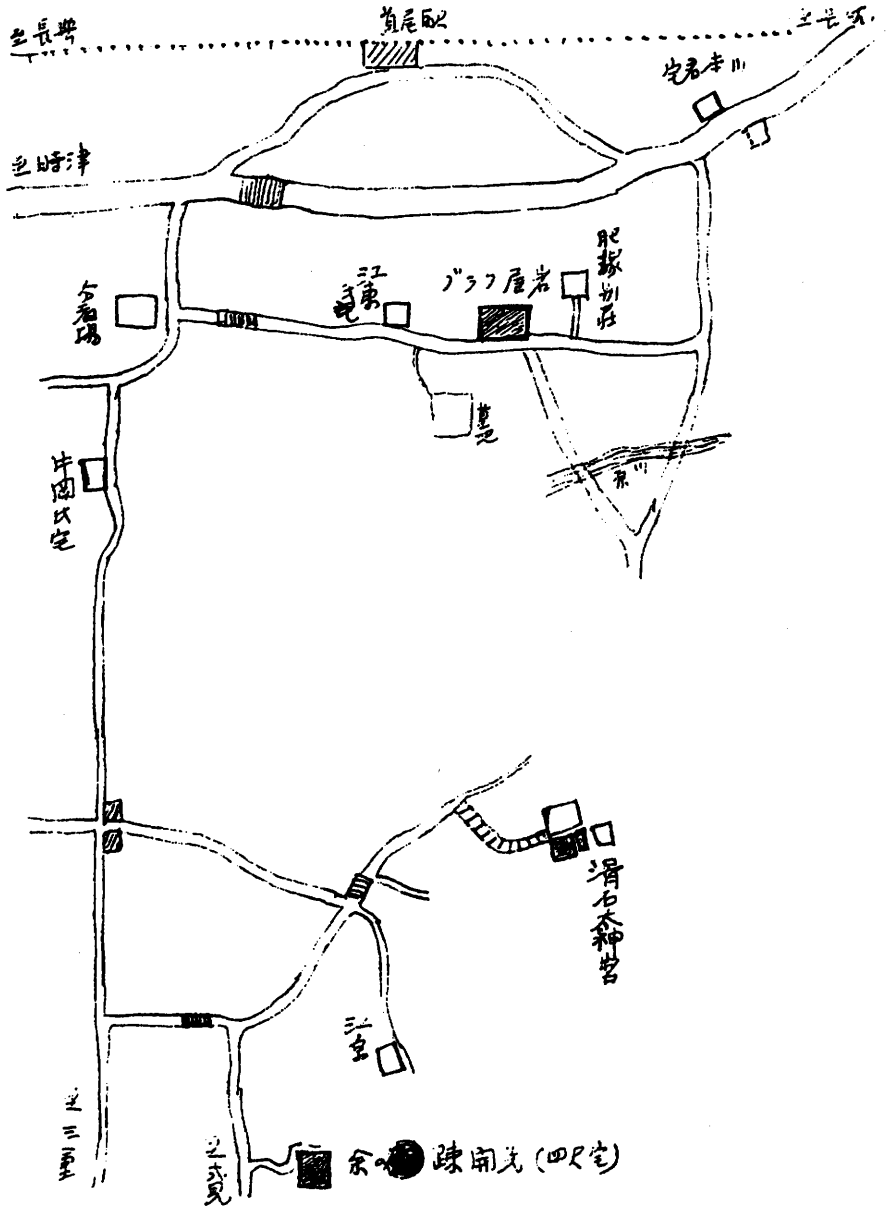
半焼　両外科病棟（三階図書室、教授室、一階の一部）、産婦人科病棟、皮膚科、調理所

焼残り、（天井及び壁の落下、調度品倒壊）、眼科、小児科、精神科、高北
大学基礎の焼残りの部分は
書庫の二階　生化学地下室
外科と其他の科も疎開品を除き図書は全焼した。実に惜しいことだ。焼残りの科には多少の薬品、材料、備品（顕微鏡其他）があったそうだが、数日の中に殆んど全部盗難にあい確保し得たものは極めて僅少であったとの事である。実に長崎市内は百鬼夜行の形で誠になげかわしいことである。大学の米も数10俵残って居たそうだが、最後に回収し得たのは其半数にも及ばなかったと、云う。
大学の財産と云えば肥前鹿島に疎開している極く僅かの品と余の家に疎開して居た涙程のものと云っても過言ではないだろう。

三、道尾仮救護所に就て

余が調外科の職員を基調として、道尾岩屋倶楽部に仮救護所を開設するに至った理由は前記の通り、大学関係負傷者を充分且安全に治療してやり度いと云う心からであった。焼跡では到底充分な診療は出来ないし、治療する医師及看護婦が不自由な起居の為に共倒れの倶れがある。滑石、道尾方面ならば安心して気持よく治療してやれるし、負傷者の方でも焼跡の土やコンクリートの上に寝るより増しだと思われる。
自分が初めに豫想した治療所は滑石の太神宮であった。拝殿に角尾教授と山根教授を寝かし、社務所に学生及び看護婦を入れたら約30名は収容出来るであろう。治療医及看護婦は余の家でも、又は太神宮の

ゴクヤ（御供屋？）でもよい。
八月十日午后自分は自宅に向う途中片岡町内会長の所によって太神宮を借りる相談をした。所が残念なことには社務所を今朝程軍隊に貸したとの事であった。その軍隊と云うのは今迄開成学園に泊まって居たものだが今度の空襲で屋根瓦がとんでしまったので来たのだと云う。総員八十名で三重峠の陣地構築をやるものだそうだ。若し是非入用なら軍部と交渉して貰いたいとの事であった。
仕方がないので一応軍部とも相談してみることにして一先づ家に帰った。帰途和田氏（十八銀行支店長）に会うと、子供の中一人は帰ってると云う。どちらだろうなどと思いながら帰路を急いだ。家の近くになると純子から女の子三人が皆出て来て泣いている。終りに精一が頭や手を包帯して出て来た。一人の子供と云うのは精一だったのだなと思って皆で家に帰った。
果して弘治の姿が見えぬ、多分講堂で下敷となって焼死したものと思われる。残念だが之も止むを得ないであろう。今日本は戦争中だ、而も現下最も重要とされる医学徒として講義を受ける最中の死だったら戦死も同じで、唯一人死んだのではないから潔く諦めるとしよう。一人でも残ったのは不幸中の幸とせねばならぬと考えた。
早速精一の火傷を改めたが、項部、背中一面、右前膊及び手背等で火傷としては全身の三分の一以下だ、これなら死ぬこともあるまい。顔を火傷しなかったのはよかったなど考えながら安堵の胸をなで下した。
中食をとって居ると軍部の人を案内して田添君がやって来た。おだやかな下士官で、萬止むを得ないことを述べて、余の協力を求めた。自分も軍隊を追い出す訳に行かなかったので、又片岡氏に相談の為二


長野
貨尾駅
日時津
肥塚別荘
グラフ屋岩
滑石大神宮
疎開先（四尺宮）

人と一諸に家を出た。

片岡氏は分教場と岩屋クラブとを提議した。分教場使用の場合は一応江口教師と市役所出張所にことわればよいとの事であった。岩屋クラブの方は江東町内会長に話せば物になるだろうとの事であった。滑石郷以外の他町内に家を借りるのはいやだったから分教場の方を先に見たが柱が二〜三本折れて今にも倒壊しそうになっている。これではあぶなくて屋内に立入ることも出来ない。仕方なく岩屋クラブを検分した。

此方は屋根瓦がとび天井が少しこわれているが柱が丈夫なので倒れそうにはない。中の机を出して床を少し修理すれば充分使えそうだ。帰りに江東町内会長の所によって、借して貰うことを交渉した。快く了解されたので、約束して帰る途中片岡氏宅の前で片岡氏と出張所長高木氏に会った。それで又三人で江東氏を訪ひお礼を申述べ夕闇の中を家路についた。

十日夕方看護婦の村上が呉源泉君夫婦とひょっこりやって来た。村上は父の病気で崎戸に帰って居た所病気も大分よくなったので大学へ帰る途中長与で空襲の為汽車が不通となり、昨夜は元調外科の入院患者の家に一泊して来たのだそうだ。呉君夫妻は昨日は危険と思い休んで喜々津に居て、今日友達の安否をたずね長崎に行った帰りだと云う。呉君は其侭帰ったが村上は家に止ることとし、余の計画を話して協力することを命じ、翌十一日は長崎大学焼跡につれて行った。

【八月十一日】

十一日の予定は古屋野教授に交渉の結果を報告し、患者輸送の方法を講ずるにあった。その他木戸君外看護婦をつれて来ること、薬品材

料を持って来ること等で、其為隣組の佐古氏を煩わし、木下氏宅のリヤカーを引いて行って貰うことにした。

大学では早速負傷者の人選、輸送法の斡旋等に努めたが却々手間取った。特に輸送法には困難が多く、到底明日の間には合いそうもなかったが夕方になって漸く目鼻がついた。それは本朝より病院本館前で診療を開始した陸軍医務部に本校卒業の赤峯、松永両君が来て居たので直接会って二人にトラックを三往復出して貰う様話した所、両君も快く引き受けて呉れたのであった。

薬品材料は調外科の床下に入れてあったのが焼残って居たのでそれを全部持って来ることとした。看護婦は夕方迄に七〜八人集ったが医師は木戸君丈で、佐藤克己君は島原に帰り、日高君は村上がわざわざ家を探して呼びに行ったけれど下宿先の西谷君（同期生、調外科に一寸居て軍医となる）の妹が火傷で帰っているのでそれが良くなる迄行けぬとの事であった。

学長の繃帯交換をして帰路につこうとした頃、村山婦長が来て顔面をチンク油で真っ白にしながら「一緒に道尾に行けなくて残念だが火傷がなおり次第出て来ます」と云って小長井に帰った。学長の横に寝て居た高木教授は不安状態が現われて一般状態も悪化し、「家へ行き度い」との希望も駄目らしいとの佐野教授の話であった。尚用意してあった担架で祖父江教授を自宅に案内したいとの事であった。医専一年生で解剖教室から逃れては出たが病状が悪化したので見て呉れと云って連れて来た子供は、頭蓋骨折による硬膜外血腫でとても助かりそうになかった。小児科の横山とか云う医局員が悪いから見て呉れとの事で診察したが、内蔵破裂による急性腹膜炎でもう瀕死の状態であった。佐野教授に報告した所、強心剤の注射をして居られた。山根

教授や石崎助教授も古屋野外科の横穴壕に来て居たが、物も云わず却々重態の様に身受けられた。大学に居れば悲惨な光景の連続で息がつまりそうだ。午后五時頃皆を集めて大学を出た。佐古氏は未だ坂の所に待って居た。看護婦数名をそれにつけ、自分は村上と二人で線路伝いに道尾に向かった。木戸君と木田看護婦とは負傷者名簿を作って居るので少し遅れると云う。大学構内に居る負傷者は大約七十名で尚増加の見込みとの事であった。

帰途川本君（大学薬局勤務）の家によって仮救護所への協力方を頼んだ。快よく承諾して呉れたのは嬉しかった。尚昨日余の家に来てシャツを貰い水筒をかりて行ったと云う学部四年の田中隆彦、谷本博玄の両君に岩屋クラブ清掃を頼んで置いたが、夕方遅くなったのでクラブには立寄らなかった。

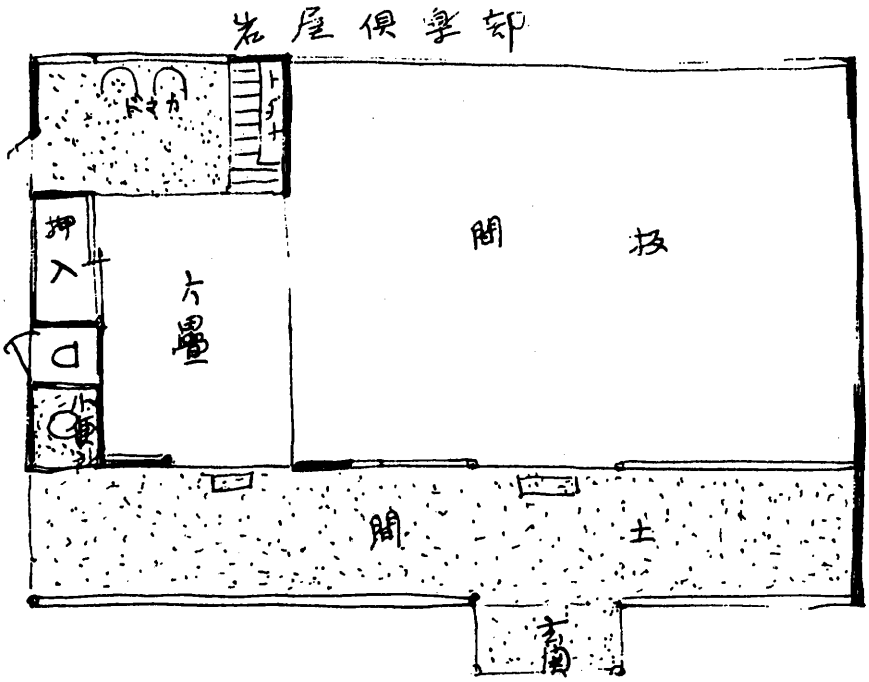
先発の荷物及看護婦は既に四尺宅についていた。看護婦は宮崎、阿部、本田、出口、笹川、酒井、矢口の七人で、これに村上、木田を合わせると九人になる。木戸君を合せれば十人、これが今夜は余の家の六畳にゴロ寝することになったのである。火傷の精一は案外元気がよい。

夜に入ってもとうとう木戸及木田両君は帰らなかった。

【八月十二日】

十二日朝早く村上をつれて山下氏宅へ往診に行く途中両君がやって来るのに会った。聞けば昨夜は滑石迄は来たが遅くなったので分教場で泊ったのだそうだ。電燈もない、硝子の破片が一杯ちらかって居る所で良く寝られたものだ。

十二日の予定は岩屋クラブ及太神宮の清掃、負傷者の収容である。



木戸、木田両君は患者受取の為大学に出向き、残りの看護婦の内四人は岩屋クラブに他は太神宮にそれぞれ掃除に行った。

余は精一の交換終了後岩屋クラブに行ったが、片岡氏宅で川本君が米の配給のことで困惑しているのを見た。聞くと医師及看護婦が十数人当地に移住したにも拘らず、食料の配給が貰えぬのだと云う。副食物は村家から買うにしても米はどうしても配給に待たねばならぬ。而も実際の米は隣の肥塚の倉庫にあるにも拘らず、其処に居る巡査が救護本部の許可なくして出す訳に行かぬと頑張るとの事であった。救護本部との交渉には長崎の井樋の口迄行かねばならぬと云う。仕方がないので川本君に御足労を願うことにして、自分はクラブに向かった。

クラブにつくと看護婦と滑石警防団員四名がポカンとして何にも手をつけず休んでいる。自分の到着を待って居た様でもあるが又自分が行かねば何もやらぬ様にもとれる。真先になって内部の清掃に着手した。皆も少しずつやり出した。こわれた神棚を修理して適当の所に安置し、天井及床板の落ちかかって居た所を修理し、板間、畳の間及土間等を清掃して見違える様になった。

やがて正午にもなったが、長崎からのトラックは到着せぬ。仕方なく午后四時頃迄に掃除を完了し、其処に来た田中、谷本、石神の諸君と看護婦をつれて帰宅の途中滑石分教場の所で炊出しの夕食にありついたので学生諸君に一つ宛分けてやり分教場で食べた。石神君は田添氏宅に二〜三日厄介になって居たのだが怪我で歩くのがつらいから岩屋クラブにとめて呉れと云うので、快く許可し外の学生とも分かれて自宅に帰った。

長崎へ行った木戸、木田両君も夕方帰って来たが、トラックが大学へは一台も来ないので今日は連れて来ることが出来なかったが明朝は

川南のトラックが来て学長達を案内して呉れるそうだと報告して居た。然し一台一回だそうだからとても学生、看護婦迄充分連れて来ることは出来そうにない。大いに困ったがどうする事も出来ない。事の成行にまかすることにして其夜は其侭疲れた体を夜具の上に横(よこた)えた。木戸君は空襲以来初めて夜具に寝るのだと大変喜んで居た。

昭和四十五年七月五日誌す

原爆直後の日記は昭和二十年八月九日から同月十二日までの四日間で、その後が空白となり、九月二十四日あたりから又書出されて、十月二十六日に及んでいるので、この間四十二日分が欠如していることになる。真に惜しい極みである。その理由は多分

① 滑石救護所の仕事が急に多忙となったこと

② 看護婦達（九人）が余の疎開先（長崎市滑石郷一五一八番地四尺秀治君の家）に寝泊りすることになったので、昼も夜も暇がなくて落ち着いて書くことが出来なかったこと

③ 僕自身が原爆症にかかって病床に寝ついてしまったこと

等によるであろう。然し二十六頁から五十頁までを空白にしてあけておいたのは、後で書く積りであったのに、実際は九月下旬からしか書いてなく、空白が空白のまま放置してある理由は

① 院長事務が多忙であったこと

② 原爆症による衰弱が充分癒えずに、根気がなかったこと

③ その後はこの日記のことをすっかり忘れて外科教授としての仕事に没頭したこと

等によるであろう。

この日記帳は昭和四十二年七月十三日に日本リーダースダイジェストの中村巌君に貸すまで僕の書庫にあり、すっかり忘れたまま放置されていた。中村君に貸した経緯は次の通りである。

アメリカの記者（多分Reader's digest）Mr. Chinnockが中村君とやって来て、長崎原爆当時のことを色々質問した。広島のことはアメリカで詳しく知られているが、長崎のことはさっぱり知られていないので、Chinnockが書いて単行本にして出したいとの事であった。

洵に結構な話なので、僕も云われるままに協力を約束し、この日記の事を話したら、暫らく貸して貰いたいというので貸したが、昨年返して貰らうよう手紙を出したら電話で近日中送るとの返事があったきりその侭に打ち過ぎていた。

本年（四十五年）二月二十八日に仁科記念財団の加納竜一氏外一人（相原秀次氏）が突然来られ、その時この日記の話が出て、中村君から取り返してやろうとのことだった。お二人とも間違いのない立派な方とお見受けしたので、宜敷くお願いし、尚僕が昭和二十一年頃書いた「長崎における原子爆弾傷害の統計的観察」という論文（四編から成る）のレプリント（長崎ＡＢＣＣが製作して僕に与えていたもの）をお貸しした。

本年五月頃の或る日加納氏から絵葉書に書かれた簡単な書信を受取ったが、それには僕の日記が中村君から取返されたことが記してあった。僕もお礼の手紙を書き、御用済み次第返送して頂くようお願いした。

六月十八日にＮＢＣの船山君、田川君ほか二人来訪、主な用件は原爆直后に永井隆君が書いた「原子爆弾救護報告書（二十年八～十月）」について僕の意見を聞きに来たのだったが、その時僕の日記の話が出て、是非見せてくれとのことだったので、「日記は唯今加納氏の手許にあるので、若し必要だったら同氏を訪ねて見せて貰うか、レプリントをとったらいいだろう」と答えておいた。

六月二十四日にテレビ出演（永井君の報告書及び彼の人となりについて座談会）の為ＮＢＣに行った時、木島氏のお話しでは、僕の日記のレプリントが間もなく長崎へ来るとの事だったが、七月二日には木島氏外二人が来訪され、その現物を返して頂いた時は、久し振りに恋人の顔でも見るように嬉しくてたまらなかった。

その内容は、約二十年間見ることもなく放置していたので、殆んど忘れかけており、僕のうろ覚えの記憶も大部分違っている所があった。例えば、僕が大村海軍病院へ行ったのが二十年九月二十六日であった事は、記憶も記録も間違ってはいないが、記憶では「迎えに来たトラックに寝ながら運ばれた」と思っていたが、記録によると「疎開先の滑石から道ノ尾駅まで歩き、汽車で新興善小学校に行き、バスで大村へ行った」ということになっている。記録に間違いはない筈だから記憶が如何に頼りないあやふやなものであるか、愕然たらざるを得なかった。

僕はその記憶を辿って八月十三日から九月二十五日迄の空白を埋めようと思いペンをとったが、記憶が全く信用できないとすれば、原爆から二十五年を経過したこの記録は却って史実を枉げることになるかもしれないが、確実と思われる事項だけでも書き残したいと考え、敢えてペンを走らす次第である。従ってこの文には「……した」とか「……であった」とか云う確定的な文句の代りに「……したと思う」とか「……であった筈である」等の文句が多分に見られると思うが、読まれる方はその辺をどうか御了承の程お願いしたい。

八月十日より十二日までの記録補遺

【昭和二十年八月十日】

(1) 角尾学長及び高木教授を収容した防空壕

この日記ではその防空壕が調理所裏の横穴とも書かれ（(16)頁、(116)頁）又、外科裏の横穴（(166)頁）、古屋野外科手術場裏の横穴防空壕（「追憶」6頁）等とも書かれ、どれが本当か判り難いようであるが、僕の記憶では調理所裏の横穴防空壕が真実のようである。古屋野教授はその前に本部を作り、後十一日には南講堂と調外科手術室との間の空地へ移し、更に調外科の部屋を掃除して、そこへ移された。何日間焼跡に居られたか。僕は十二日以後は滑石に居て岩屋クラブに収容の負傷者の治療にあたったので詳細はわからないが、九月初めには市役所の近くにある赤煉瓦建の商工会議所の一室に移されていた。（桜町）

横穴防空壕は二室に分かれており、①の部屋の奥に角尾学長、入口に近く高木教授を共に輸送車の上に寝かせ、②の部屋には山根教授と石崎助教授を収容した。

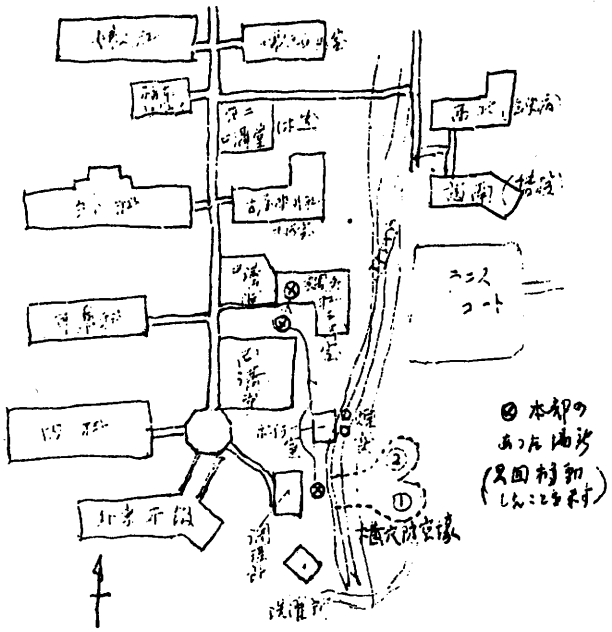
(2) 滑石へ帰った道順

十日正午過ぎに大学を出発して山里町へ行く石段の坂を上り、僕が前に住んでいた山里町二九五番を通って山里小学校下へ出た。

この道は、前は毎日のように通っていた道だったが、両側の家々はすべて焼け落ち、道には破れた屋根瓦が一面にうず高く散乱し、靴ばきでこれを踏むとまだ熱くてたまらない程であった。日頃よく出会っていた守先生の家もなく、脳病院も跡かたもなく路傍や屋敷跡には焼けた屍体がごろごろころがっていた。隣組の池田さんの奥さんらしい屍体もあった。

以前住んでいた二九五番地の屋敷跡も一寸のぞいてみたが家はなく、破れた瓦が庭や泉水を埋め誰のともわからぬ屍体も幾つかころがっていて、目もあてられぬ有様だった。僕等の疎開の世話をしてくれた池田さんも多分焼け死なれたことであろう。合掌して御冥福を祈り、匆々の中に山里小学校へ向った。

近路をするために小学校横の道を行ったが、浦上川にかかっていたコンクリートの橋は半分がくずれ落ちて渡ることが出来ない。一旦川へ下りようかと思ったが、すぐ下流の大橋が潰れずに残っているのが



見えたので道を引返し、大橋を渡った。橋の上から川をのぞくと、水際に屍体が折重なるようにころがっていた。恐らく水を求めて川岸に下り、そのまま動けずに死んだものであろう。皆半裸体となっており、何が何だかさっぱり判らない。自分の生きているのが不思議な位である。

大橋兵器（三菱兵器大橋工場）の前あたりの田圃には荷車がひっくり返り積んだ荷物も横倒しになっている。あとで判ったのだが、北村包彦教授の荷物を疎開させる積りで誰か人を頼んで運んで貰っていたのだそうだ。数日間その侭放置されていたので中味の大部分は既になくなっていたという。

途中川本君宅に立寄り、片岡舜一君を訪ねて救護所の交渉をしたことは日記に記した通りである。

(3) 北村包彦教授のこと

北村教授は二十年七月頃になって「どこかに疎開したいが滑石をあたって貰いたい」との事だったので、四尺の婆さんに相談すると、お婆さんの妹の嫁いでいる多以良さんの家はどうかということで、お婆さんに相談して貰った。僕からの相談ではあり、（今年の初め頃多以良氏のお嬢さんのひどい虫垂炎を治してやったことがある。僕が四尺家に疎開出来たのもその為だ）漸く承諾して頂いて、八月八日に（？）移って来た。残りの荷物は九日に運んでいる時原爆にやられた訳である。

北村教授夫人は八月八日午后、多以良氏宅に疎開して来られたが、教授は一緒に来られず、九日夜負傷して初めて来られたとのこと（多以良氏談）、八日夜は多分元の家に一人で泊られたのであろう。（滑石の多以良氏によると、北村教授が帰って来たのは夜八時か九時頃、既に暗くなってからだったそうだ）

九日には北村君は外来で被爆したが、南側の部屋だったので、顔にガラス傷を受けた位で助かり、同日夕方リアカーに乗り滑石の疎開先に運ばれたとの事である。僕が十日に帰った時（午后三時頃）、精一（長男、大橋兵器工場で被爆）は既に包帯をしていたが、それは北村君にして貰ったとの事だった。それは九日の帰りがけにやって貰ったのか、一旦帰った後又出かけて来てやってくれたのか、或いは十日の午前中にやって貰ったのか、純子も確実には憶えていないという。

九日夜は四尺一家（お祖母さん、秀治君の妹、子供恵美子）と一緒に純子達（母上、精一、朝子、礼子、惇子）も四尺家裏山の防空壕で一夜をあかしたそうである。勿論一睡もせず、僕や弘治の身を案じて恐怖の一夜を過したそうだ。十日午后三時頃僕が帰った時は泣きながら迎えてくれたが、弘治は未だ帰って来ず、畳の上に寝ながらも精一の火傷や弘治のことが気にかかり、矢張り寝苦しい一夜であった。精一は案外元気だったが、何と云っても背中一面、両腕の後面の火傷で、痛くて寝られないらしい。

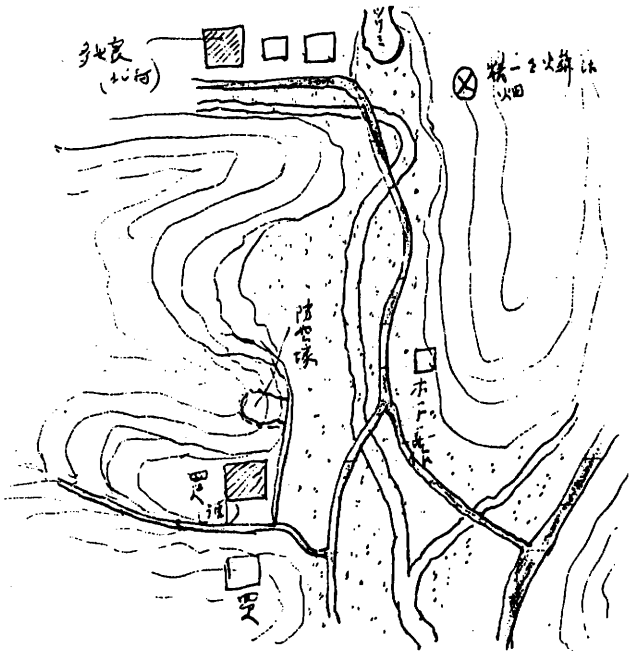
(4) 家の損害と家族の動静

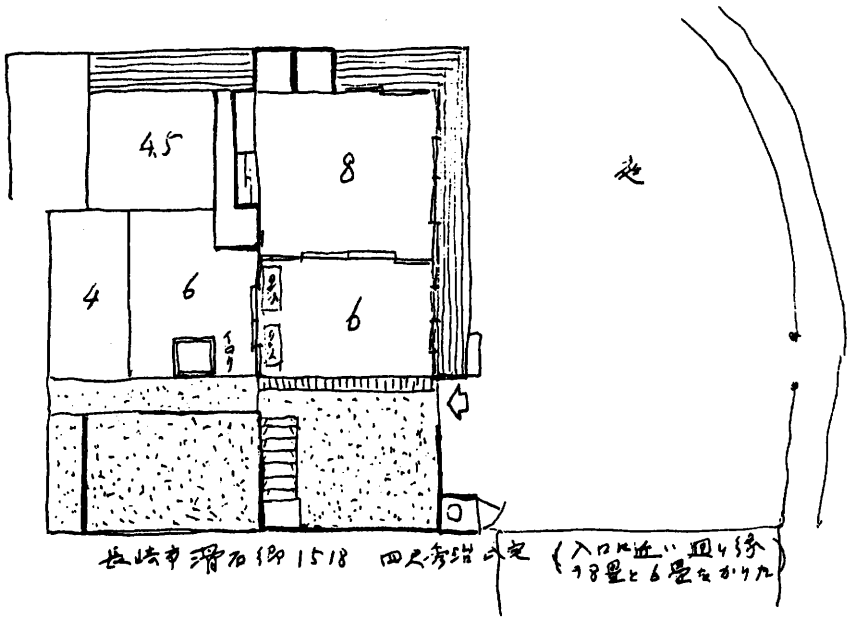
この家は爆心地の西北方、直線距離で四キロメートルの所にあるが、爆心地に向かった方には丘があり、その反対側の斜面に建っていて、座敷の縁から見ると、下の田圃や小川を見おろし、その向うには又丘がそびえているような谷あいの、まことに眺めのよい家だった。

原爆が炸裂した瞬間には、僕は大学病院内の教授室（爆心から七〇〇メートル）、長男精一は三菱兵器大橋工場内のコンクリート建物の二階の部屋（爆心から一・二キロ）、次男弘治は大学の解剖学講堂内（爆心より約五五〇メートル）、末娘の惇子（小学校二年生、普通な

ら道ノ尾の分校に登校する筈のところ、朝早く空襲警報が出たので休みとなっていた）は北村教授が疎開した多以良氏宅の縁に腰かけていたとの事（爆心地から約四・五キロ）、その他のものはこの家に居て、母は土間で何か仕事中、純子は座敷で仕事中、朝子と礼子は縁側に腰かけ、足をぶらぶらさせながら何か話していたという。

朝子の話では、縁側で青白い光を見たのですぐに部屋に上り六畳の隅にあったタンスの前に行ったら、間もなく障子がとび、中にはめてあった硝子が割れて飛散し、頭の上からフトンが落ちかかって来たという。このフトンは押入れがないのでタンスの上に積み重ねてあった





ものである。

純子の話を聞くと、矢張り青白い光を見たので唯事ではないと皆を呼び集めていると、ひどい家鳴震動がして障子が倒れ、ガラスが割れ散り、タンスの上にあった（僕が先哲医言抜萃を書いていたもの）がヒラヒラと舞い落ちたのが今でも目に映って忘れられないという。母は土間で大声でわめき「家に爆弾が落ちた。早く早く」と云ってうろうろしていたそうである。それで取るものも取りあえず、四尺一家の人達と走って裏の横穴防空壕に逃げ込んだとのことである。皆は先ず惇子の身を案じたが、惇子は多以良家の北村教授の奥さんの所へ行ったことがわかり、間もなく帰って来て皆と一緒になったと純子は云っている。

暫らく防空壕の中から様子を窺っていると、下の道では逃げまどう人々の慌しい動きが見られ、長崎に大きな爆弾が落ちて家が焼けているという情報も次々に入って来た。それで僕や精一、弘治達はどうなったかと気が気ではなかったと、二十五年後の今日でも当時の恐ろしさを想い起すように声をふるわしながら話すのである。

家をその侭にして防空壕へ走ったので、暫らくして家に帰り、跡片付けなどをしている時に、精一がワイシャツをひらひらさせながら走って帰って来たそうである。そして皆の顔を見ると「畜生、畜生」と憤怒をぶちまけていたということである。（八月九日の正午頃だったと思われる）

精一は気分が落ちつくと次の様なことを話したという。「十一時頃ピカッと光って家がガラガラと地震みたいに震動し、部屋の中がめちゃめちゃになったので、すぐにとび出し、お父さんや弘治がどうなったかと大学へ行く積りで大橋まで行ったが、既にその先では火事が起り、人々が大勢右往左往しており、被爆者たちが自分の足をつかまえて『助けてー』と云って離さないので行くことが出来ず、大学へ行くのを断念して帰って来た。長崎はもう大変でお父さん達はどうなったか判らない」と云いながら僕と弘治の身を案じていたそうである。

破れたワイシャツを脱ぎ、背中一面の火傷に油を塗り、新しいワイシャツと着替えて、皆と一緒に防空壕に入っていると、北村先生がリアカーに乗って帰られたという情報が入ったので、一つには僕や弘治の様子をきき、一つには精一の火傷を診て貰うために、多以良家に純子初め皆揃って行ったそうである。それが九日の何時頃だったか判らない。多分午后も夕方に近い頃ではなかったかと思う。

純子は朝子と一緒に僕達を探しに大学へ行くことを北村教授に相談したそうであるが、北村君は「行ってもとても判らないし、今行っては火事であぶないから行かない方がよい」と思い止らせたとの話である（朝子の話）。

そういう訳で、九日は僕達の情報が判らぬままに、気もそぞろに防空壕で一睡もせずにあかしたという。本当に気が気ではなかっただろうと想像されるが、僕は僕で弘治の事が気になって、又被爆者を見捨てることも出来ず、滑石の皆の事を気にかけながらも、「自分は丈夫だから帰ったら皆安心するに違いない」など、帰った時の皆の喜びを想像しながら大学の裏の丘で一夜を過ごしたのであった。

僕が元気であるとの情報を純子達が耳にしたのは、十日の朝十時頃だったそうで、第一報が柿田嬢（朝子の学友）の姉さんから、次は二人の学生（誰だったか判らない）。尚川本君からも知らせがあって、純子達は初めてホッと胸をなでおろしたそうである。

僕が疎開先の家に辿りついたのは十日の午后三時頃であったろう。（その時の様子は(18)頁の下部に記載）。一歩家にふみ込んだ時の荒れ

様は大変なものであった。障子は破れ、硝子は割れ、天井は浮き上がって、爆風の強大さを想わせる。焼けなかったのがまだしも不幸中の幸と云えよう。

精一は全身に包帯をして八畳の部屋に寝ていたが、こんな有様になって申訳ないと、涙を流しながら詫びていた。そして昨日の恐ろしい光景をしみじみと物語っていた。僕は一度精一の火傷の状態を点検してみたが、これならまあ大丈夫だろうと安堵の胸をなで下した。

精一は原爆破裂の瞬間、開けはなされた窓を背にしてテーブルに向い製図をしていたそうである。帽子（学帽か戦闘帽かわからない）をかぶっていたとみえて覆われていた所には毛髪があるが、露出していた後頭部は剃刀でそった様に坊主になっている。火傷は背中一面と頂部、右前腕及手背等で、ズボンをはいていた所ははっきり一線を劃して火傷を免れている。僕が診た時は第二度の火傷でまだ化膿もなく比較的元気であった。硝子傷はなかったように記憶している。多分後の窓があけてあった為であろう。ワイシャツは一部焦げ、ずたずたに裂けていた。恐らく爆風によるものであろうが恐ろしい力を持ったものだと驚いた。十日夜は四尺宅に泊まった事は云うまでもない。（19頁参照）。母も、純子も、三人の娘達も女連中が皆無事であった事は何

多以良氏によると北村教授が大学から帰られたのは、九日の夜だそうで、まだ多以良氏の家に行かれたことがないので、片岡町内会長の家によって尋ねられたそうだが、丁度其処に多以良氏が居合わせたのですぐに案内したという。だから純子達が北村教授を訪れたのは九日の夜か、若しかすると十日の朝だったかも知れない。兎に角僕が十日午后に四尺家に帰る前に、精一は北村教授に火傷の治療を受け、包帯もして貰ったものと思う。というのは包帯（全身）の仕方が、とても素人では出来ないような仕方で、北村教授以外には出来そうな人は居なかったからである。

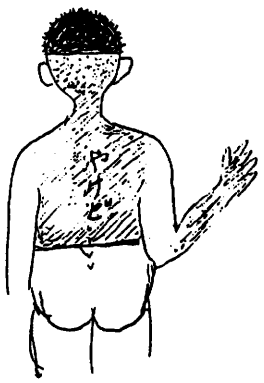
よりであった。

【八月十一日】

十一日には十日の晩にうちに泊まった看護婦村上をつれて大学に出かけた。本誌によると薬品、材料を大学から持って来る為に、佐古氏（僕の疎開していた四尺氏の隣組の人）にリアカーを引いてついて来られるようお願いしたとあるが僕等二人は近道をする為に、まだ汽車の通っていない線路づたいに行き、佐古氏は住吉を通る普通の道を行って貰ったと思う。

線路を歩いている時、敵機が一機やって来た。銃撃されては大変と思い崖下におりたことを覚えている。敵機は何もしないで南の方へ通りすぎた。多分偵察に来たのだろうと思う。

大学につくと直ちに古屋野学長代理に報告し、滑石につれて行く負傷者を選ぶこととした。



背中一面に火傷を受けたのに両上腕が無事であったのはワイシャツ前腕をまくり上げていた為ではなかろうか。右前腕と手背に火傷をうけたのは体位が多少右によっていて右手をまげて図をひいていた為ではないかと思われる。

(1) 内藤勝利教授の死体発見のこと

調外科の焼跡で古屋野教授と色々打合せをしていた時、学部四年生の松瀬寿良君が「婦人科の廊下に内藤先生らしい死体がある」と報告して来た。そしてその死体からとったという万年筆、手帳、シガレットケース等を示した。内藤君は煙草を吸わないのでシガレットケースはおかしいと云いながら聞いてみるとお守りの札が沢山出て来た。これでは内藤君ということは判らないが、手帳を開いてみると、それは電車の定期券で、明かに「内藤勝利」の名が記されており、その死体が同君であることが明らかとなった。早速松瀬君について行ってみると、建物は焼けていず、大きな梁が落ちていて、それが内藤君の頭にあたったらしく、同君は上着、ゲートルの侭エビの様にまがって死んでいたが（東の方を向いていた）、その右手の白壁には赤黒い手形がついていた。頭から出た血を右手でおさえ、その血のついた手を壁にあてたらしい。関取りが色紙などに押す手形そっくりだった。ただ小さい丈である。平素やせていた同君がぶくぶくに肥り（死后変化で膨化していたのだろう）、顔色は黒ずんで見えた。一寸見ると違う人の様だった。内藤君の消息はそれまで不明で、どこそこで見かけたというデマがとんだり、多分家に帰られたのだろうと云われていたが、これで死亡が確認された。多分即死に近いだろう。

(2) 高木純五郎教授及び石崎戌助教授の死

十日から調理所裏の防空壕に収容されていた高木教授は脱力状態が強く、食欲は全くなく、流動食もとらず、脈搏頻数微弱、色の黒い人だった為か、蒼白というよりも寧ろ土色を呈していた。十一日午后は不安状態を呈し、ベットから降りたり又上ったり頻りに家に帰りたいと云っておられたが、一般状態が悪く運搬の途中で死亡される懼れがあるので、佐野教授の説に従い、一旦は担架を用意したが、その担架では祖父江教授を佐野教授宅に運んで貰い（学生数名がこれにあたった）、高木教授は壕内に留めて経過を見ることにした。然し、容態は刻一刻と悪化の一途を辿り、午后七時遂に鬼籍に入られたそうである。夫人にもみとられず、唯友人や学生達の間で淋しく死んでゆかれた心情は真に痛ましい限りである。

石崎助教授の死は、大学の記録では十一日（忘れな草1号20頁）とあり、古屋野教授の言葉では「被爆後四日程壕の中で手当を受けた後他界」とあるので十二日か十三日（忘れな草1号21頁、石崎徳正氏手記中）、岩永光陸氏の手記では十六日（追憶75頁）となっておりまちまちで確定し難いが、僕が九日、十日、十一日にみた彼の状態からすると、十一日か十二日に死んだのが真実だと思われる。滑石へ連れて行く人選から洩れたことから考えても十一日夜に死んだというのが本当だろう。但し僕は十一日の夕方まで大学に居て滑石に帰り、其后会っていないので実際は不明である。

角屋学長に関することは、「追憶」の中の前田ハルエ婦長の手記に詳しく記されている（「追憶」（63頁）「思い出」前田ハルエ）

角屋学長等は十二日夜バスで運ばれ、矢張り岩屋クラブの床の上で一夜を明かされたそうである。（追憶63頁高橋博君の手記による）バスとあるのは矢張り間違いではないかと思う。前田ハルエ婦長の手記では矢張り「トラック」と書かれている。（追憶66頁）医専三年の北郷君が学長と一緒に岩屋クラブに来たそうで、彼の話ではバスだったと明言している。

【八月十二日】

本誌(24)〜(25)頁の記載では、負傷者の岩屋クラブ収容は十三日のように解されるが、本誌(167)頁には「十二日夜に入り角尾学長、山根教授……」とあるので、多分十二日には来ないと思って書いていたのが十三日に岩屋クラブに行ってみると、十二日夜に角尾学長以下十数名が着いていて、其処で一夜を明かされたのだろう。

岩屋クラブには学生数名が泊まっていた筈であるから、多分負傷した学生、看護婦達はクラブの床の上に寝かされ、角尾学長と山根教授は、担架のままクラブで夜を明かされたと思われる。というのはこのお二人は滑石太神宮に収容する予定になっており、太神宮の拝殿は十二日に看護婦達がちゃんと掃除して、いつでも収容出来るようにしてあったが夜に着かれたので、太神宮へお連れすることが出来ず、僕等もそれを知らずに過ごしたからである。

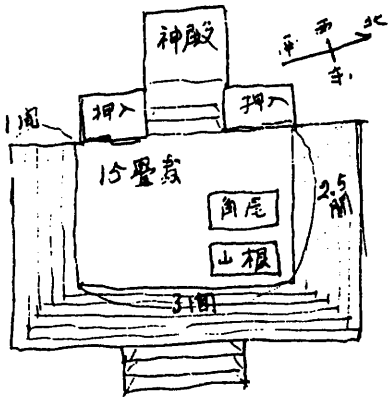
余の記憶による八月十三日以降九月二十五日迄の記録

滑石救護所の開設

【八月十三日】

今日から愈々滑石の臨時救護所が発足、朝の中に角尾学長と山根教授を滑石太神宮（(20)頁の地図参照）にお連れし、調の宅から夜具二人分を運んで図のように並べて敷き、学長を奥に、山根教授を手前に寝かせた。下は畳、障子も戸もなくあたりはこんもりと大きな木が繁って、涼しい所だった。学長は「ああ、いい所だ、お蔭で気分がさっぱりした」と大変喜んで頂いた。付添は角尾内科の前田婦長が九日からつきっきりで勤め、山根教授と二人分の世話をしていた。僕は一日一度包帯交換をし、（看護婦は多分岩屋クラブに居た調外科のもの）、時々娘達（よく惇子が運んだ）に食事を運ばせたが、三度々々ではなかった様だから、前田婦長の分や、宅から運ばなかった時は、前田婦長が炊事をしていただろうと思う。山根教授の身内の人はなく、学長夫人も自宅（西山の学長官舎）に居られるお子さん方のことがある為か、この日には姿をお見せにならなかった。追憶に記載の前田婦長の手記を読むと筬島、手島、中村、土山の諸君が来たように書かれてあるが、それは十三日でなく、十三日から死亡の二十二日までの間に来たものと思う。

僕は太神宮の収容が片付くと又岩屋クラブに行って、負傷者の治療、民家への往診などをやったに違いない。然し太神宮へは朝夕、二回は行って様子をみた筈である。



【八月十四日】

朝太神宮を見舞うと、学長の方は大した変りがなく、熱が高いだけで元気は意外によい。山根教授は昨十三日午后から少しずつ起ってきた牙関緊急が高度となり、全身の痙攣発作も見られるようになった。特に太神宮に参拝者が来て鈴を鳴らすと、その度毎に強度の後弓反張（opisthotonus）が起って困った。鈴をならすなと叱る訳にもゆかず、唯お願いするより外はなかった。

どうして持って居られたのか知らないが、学長は破傷風血清の瓶を僕に渡されて「これを注射してやり給え」とおっしゃる。すぐに用意して四十cc全部を半分は静脈内に、半分は皮下、特に傷の周囲に注射した。これ位では駄目だろうと思ったが、外に血清がないので仕方なく経過を見ることにした。

とても困ったことは、山根教授は自分でも死期の迫ったのを自覚したのか、酒を少しくれと云ってきかなかった。僕も教授が酒好きなことは知っていたので、何とかしてあげたいと思ったが、戦時中の事として清酒は統制になっていてないので、止むを得ず五％アルコールを作って飲ませてみた。然し口にふくむとすぐに喉頭痙攣が起ってどうしても飲みこむことが出来ない。ネラトンを食道内に挿入して流し込んでくれとの事に、前田婦長に頼んで（僕はそう記憶するが、前田婦長の手記では木戸助教授に頼んだことになっている）、ネラトンの挿入を試みたが、その先が喉頭に届くと直ちに痙攣が起って、自分でそれを引き抜く仕末であった。「どうしても駄目かね」と弱々しい声で嘆くのを聞くと誠に痛ましい気がした。せめてアルコールの香でもかがしたらということで、ガーゼにしまして鼻孔の所にあてがったが、その様は見るに堪えない程であった。

八月十五日頃だったか、僕は弘治の実習用に病院から持ち帰っていた血球計算器を使って精一の血球計算をやった。所が、赤血球も異常に数が少いし（数ははっきり憶えていない）、白血球はこわれたのかほこりみたいになって普通の形をしたものは殆んど見られなかった。僕は数カ月試薬を放置していたので、駄目になった為であろうと思った。あの時被爆していない人を対稱にして調べてみればよかったと今でも残念に思っている。

クラブでは多くの負傷者が、下痢を起していた。而も血便である。原爆症の症状を知らない僕等は、きたない水を飲んだ為に赤痢になったのだろうと考え、血便を出すものを部屋の片隅に集めたりしたが、今から考えると笑止千万と云わざるを得ない。そのような負傷者は熱も高く、40℃を越すのが通例で、この日頃から次々に死んで行った。仕方がないので学生に運ばせ空地に材木を集めて火葬に付することにしたが、それが一人や二人ではないので、学生も材木を集めるのに当惑していた。この日に何人死んだか今は記憶がさだかでない。

【八月十五日】

山根教授の容態は刻一刻と悪化するばかりで、最早食事もとられず、意識も次第にもうろうとしてきて、死を待つばかりとなった。教授の身内の人はまだ誰も姿が見えない。遂に息絶えて他界されたが、その時刻は僕の記載では午后七時過ぎ（追憶7頁）となっており、前田婦長の手記では陛下の終戦放送の直前（追憶68頁）となっている。陛下の放送は多分正午なので、午前中ということになるが、太神宮にはラジオはないので、陛下の放送は聞かれなかった筈である。僕も道を歩いていて放送を聞くことが出来ず、通行の人にあとで教えられた程であるから、どちらが本当なのか判らないが、十五日であった事には間

違いはない。但し火葬をどんなにして何処でやったかは憶えていない。

この頃の学長の容態は前田婦長の手記（追憶68頁）に詳しく記されており、これに間違いはないと思う。ただ前田婦長は学長夫人が来られたのを機に太神宮を去って帰途についたと記しているが、それが何日であったか憶えていない。然し学長が立って見送られたそうであるから、御逝去の二十二日に近い日でなく、十六日か十七日頃ではなかったかと想像される。

岩屋クラブでは相変わらず次々に死人が出て火葬に多忙を極めた。何日頃であったか憶えていないが、看護婦木田君の思い出話によると、下肢切断の必要のある患者があったが、鋸がないので民家から普通の鋸を借りて来て、それを洗面器で消毒して骨を切ったそうである。そう云われるとそのような事があったようにも思われる。注射器の消毒はシンメルブッシュ消毒器がないので洗面器に水を入れ、それをカマド（或いは七厘）にかけて消毒した事はよく憶えている。

長男の死

【八月十六日】

山根教授が逝去されて、太神宮は学長一人になった。付添には前田婦長が残っていたが、学長の下痢がはげしくなったので筬島助教授に連絡して来て貰い、その方面の治療は学長と筬島君の協議によってやられることになり、外科は唯傷の治療だけを受持った。

僕の家では精一の容態が悪くなり、火傷面は丁度敗血症の時のように、綺麗な黄色い膿は出ずに穢い黒ずんだ稀薄な汁が出て、脈搏は頻数微弱、意識はまだはっきりしていたが、顔色はくろずんだ貧血状態で、死期の迫っているのを自覚したのか、我々両親に謝辞を述べたり、早く死んで申訳ないとか、今度生まれかわって来たら必ずアメリカの仇を打ってやるとか、云って、軽度ではあったが不安状態を呈するようになった。

学長や岩屋クラブの被爆者達も気になったが、精一が重態で今にも死にそうなので、離れる訳にも行かず、どうせ駄目だとは思ったがじっと側についてやった。純子もおろおろしながらはげましていたが次第に声も小さくなり、最後は眠るように息を引きとった。時に丁度正午頃であったろう。

遺骸は多以良氏の山で焼いて貰うことにし、男の人が背中にかついで登り中腹の畠に材木を積んで火葬に付した。時に満十八歳八カ月、短い生涯で本当に可愛そうだった。

火葬がすむと又太神宮や岩屋クラブに出かけて患者達を診、乞わるるままに看護婦をつれて往診もした。一私事にかまけて家に引篭ることの出来ない状態だったのである。

この日も亦幾人の屍体を焼いたことであろう。

四尺家の親戚に山下という家がある。其処の子供で十四～十五歳になるのが（名は山下國夫と云い）長崎駅の機関庫に勤めていた。原爆を背中一面に受けて、第2度乃至第3度の火傷を起し、家に帰って療養していたのを往診したのを覚えている。初めて往診したのは十三日か十四日だったかも知れない。背中一面に種子油をぬり、その上から

「山下國夫君を往診したのは十二日の早朝」ということが当時の記録（本誌23頁の上から2行目）でわかる。

孟宗竹の薄皮（竹の内面にある白い膜）をたんねんに貼りつけてあった。こんな治療法は初めて見たがなかなかうまく考えたものだと感心した。この子は四尺家の親戚でもあるので毎日往診してブドウ糖など注射してやったが、奇蹟的に助かって、あとでケロイドを生じ、僕等が九月下旬から診療していた大村海軍病院に収容し、ケロイドの一部を切除して植皮を行った。背中のケロイドは余りに広範囲に亘っているので、そのままにしていたところ、漸次軽快して今では殆んど全治した状態になり、日常生活にも支障を来していない。よく治ったものだ。恐らく長崎駅は爆心地から二・五㎞の所にあるので、精一のように放射線の被害が強くなかった為であろう。

然し、同じ建物にいた福田由郎工場長は顔にひどい怪我をしながらも助かり、又最近会った山口某女（当時十八歳）も同じ建物の三階にいて、両前腕に火傷を受けながら助かっているのだから、多分精一が開け放たれた窓を背にして光線をまともに受けたのに反し、前記両者はコンクリートの壁に遮られた所にいて助かったものと考えられる。又精一と同じ部屋にいたが、窓と窓の中間のコンクリート壁を背にして椅子にかけていた男の子も助かったそうだから、全く生と死は紙一重と云わざるを得ない。運命とも謂うべきか。

【八月十七日】

角尾学長の容態は段々悪化するようだ。何日からだったか学長の弟で滋と云われる方が東京から来られて学長に付添われた。当時の昭和医専の薬理学の教授とか。或時学長が体温を測るように云われ、測っておられたが、学長が「何度か」と聞かれた時、滋氏は39℃ですと答えながら検温器を僕に示された。見ると、41℃であった。本当の事を

云うと学長が心配されると思われたからであろう。学長は「汗でも出れば熱が下がるであろうが、ちっとも汗が出ないので困る」と嘆いておられた。流石は内科の泰斗だと思った。

奥様が来られた時、「美代さん、病気が治ったら茨城に帰って開業でもしよう。」と云われたのを憶えている。大学者がこんな言葉を吐かれたのは、長崎大学―否日本の将来も望みが少いと思われたからではないかと思うと、お可哀そうな御心情だとつくづく思わされた。

昼間は例の如く岩屋クラブの診療と往診とに寸暇もない程の忙しさだったが、夜家に帰り精一と弘治の居ない淋しい夕食をすました頃、大久保という近所の家から往診を頼まれたので行ってみると、畳二枚程が真赤な血で染まり、血の池の中に老人が倒れていて、左頬に大きな刀傷があり、虫の息の有様だった。聞く所によると、米の配分の事から喧嘩となり（？）、日本刀で切られたのだという。外皆（まなじり）の所から頬骨部を斜め右下方に約十㎝の切創があり、まだ少しづつ出血していた。これはいかぬとすぐに有りあわせの布（ガーゼの様でもあったが真相はさだかでない）でおさえ、家の若者に命じて岩屋クラブから縫合の器械と材料を持って来させた。一度は物が足りずに二度行って貰った。その間約一時間じっと傷口を押えていた時、八時頃であったか、片岡舜一（町内会長）君が庭先に来て、「調先生、その患者は放っておいたらどうです。早く逃げないと危ないですよ。米軍の上陸騒ぎで、住吉の巡査は一番先に逃げましたよ」という。親切に教えてくれたのであろうが、瀕死の患者を放置する事は出来ず、「この侭では死ぬかも知れないから、止める訳には行かない。縫合がすんだら考えてみます」と返事して材料が揃うと一人で縫合をすませた。木戸君も看護婦も居なくて一人でやったが、どうして木戸君達が居なかった

のか判らない。多分まだ岩屋クラブの方にいたものでろう。
その患者は縫合後化膿もせず綺麗に治癒した。お礼に鶏を一羽（つぶして羽毛をぬいたもの）を頂いたようである。

【八月十八日】

四尺家では母親（五十五～六十歳位）と娘（エイという、二十五歳位、出征中の井手氏の嫁）と孫（恵美子、0歳）と三人いたが、朝から岩屋山に避難すると云って荷物をそろえていた。そして我々にも避難するように勧めたが、僕は「大丈夫だから、僕たちはここに居ます」と云い。純子や母上にも逃げないで其侭家に居るように云い残して岩屋クラブに向かった。途中片岡氏宅の前では大きな大八車に色々の荷物や人が乗り、今にも何処かへ避難する様な様子であった。僕は片岡氏に「逃げなくても大丈夫ですよ」と云ったが、どうしても村松方面に逃げると云って大童であった。

岩屋クラブに着くと看護婦達が「こわいから家に帰して下さい」と泣くようにして願い出た。考えてみると、折角助かったのに若しもの事があったら親御さん達に申し訳ないと思い、救護所の閉鎖を決意して、負傷者の転送にとりかかった。

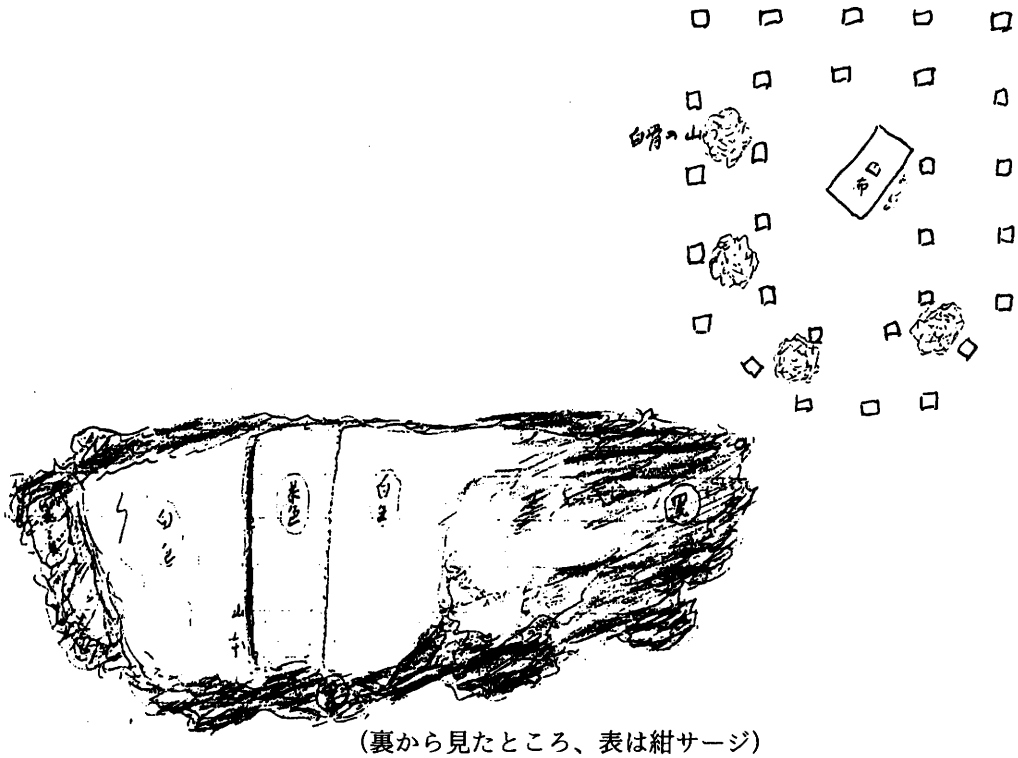
送り先は時津、諫早、大村等である。何人の負傷者がその時生きていて何処へ誰をどんなにして移したか憶えていないが、その中に学部四年の藤原昌が居たことは今でも憶えている。傷は火傷でなく、どちらかの肘関節部の骨折であったと思う。この人は親戚が大草に居るので其処に行くと云って一人で行ったようである。親戚というのは藤原政治氏でその后僕も知り合いとなり、藤原昌君も幸い生き残って今では鹿児島県の川内市で開業している。

看護婦は皆思い思いに去って行った。喜々津に帰るもの、その友の家に一夜寄寓する為に一緒に出かけたもの、五島へ帰るという人達は山を越えて式見か三重の方へ行った。途中で何処かで泊り、便船を見つけて帰る積もりであろう。

中に阿部という看護婦は被爆の際に左口角から斜め上方に大きく頬が裂け、僕が綺麗に縫い合せてやったが、その人はいつ何処へ行ったか憶えていない。

大男の被爆者が死に切れずに（瀕死の状態なので他へ移すことも出来なかった）一人でクラブに残ったがそれは翌日死んだので二～三人で前の墓地に運び（運搬人の中に薬局の川本君と台湾の学生がいたようだ）、何家の墓ともわからぬ大きな墓の下の穴の中に押し込んだのを憶えている。悪い事をしたと思ったが、実際は万止むを得なかったのである。

十八日の夜は、看護婦も皆帰り、負傷者の後始末もほぼ片附いたので四尺の家で分散会を催した。弘治達が飼っていた鶏二羽をつぶし肥塚酒造所から酒一升を分けて貰って（酒二升をたのんだが、これは出してはいけない事になっているからと云って倉男がどうしても肯（がえ）んじない。そんな事を云っていても今にアメリカ軍に取られてしまうよと云って漸（ようよ）う一升だけ分けて貰った）、村の者一人も居ない四尺の家で盛大な慰労会をやったのである。その時集ったのが誰々だったか、木戸助教授、医専三年の上野君、片山君がいたのは確かだがその他に三～四人いたと思う。全体では六～七人いた筈である。その中上記の三人は二十四日まで僕の家に泊まっていたが、あとの人達は皆何処かへ帰っていった。家でも男の子二人が居なくなったので却って賑やかで娘達は喜んでいた。



（裏から見たところ、表は紺サージ）

【八月十九日～九月二日】

その後の角尾学長については追憶の記事中に高橋博君（追憶60頁）及び前田ハルエ婦長（63頁）が詳しく述べておられるので再録をさけるが、学長が永眠された時の有様は、上記両人が居合せず、他に記載がないので僕の記事（追憶5頁、6頁）が唯一のものとなった。それによると死なれたのは八月二十二日午前十時、枕頭に侍っていたものは奥様、滋氏、古屋野教授、教室員（多分筬島助教授、その他であったろう）。尚うちの純子も恐らくいたかも知れないと思う。木戸助教授、上野、片山両君もまだ僕に泊まっていたので（追憶84頁調記）或いは列席していたかも知れない。少く共木戸君だけは。

木戸君達が僕の家に残っていた頃、お座敷の縁側で、惇子が上野君の髪毛を引張り、ボロボロ抜けるのを面白がっていた事がある（惇子は当時八歳）。僕はそれを見て止めさせたが、既に原爆症（脱毛）が出ていたのである。

木戸、上野、片山の三名は角尾学長の告別式（二十三日）がすんだ翌日（二十四日）に僕の家を去ったことになっているが（追憶84頁）、その后皆原爆症を一応出したに違いない。然し幸に難関を切り抜けて木戸君及び片山君は今元気に医業に従事しており（木戸君は福岡県田川市立病院長、片山君は四国の某市で開業中とのこと）、上野君も一度は回復して精神科に進んだが、〇年後の昭和〇年に腹部悪性腫瘍で惜しくも死亡したとの事である。

八月二十二日・角尾学長の死については、忘れな草四号三十五頁を参照の事。
編者

次男の遺骨発見

【八月二十八日】

救護作業が一段落ついたので、僕は純子及び三人の娘を連れて大学病院に行き、弘治の消息をたずねた。被爆后約三週間たっても帰って来ず、居所が判らないので、てっきり講義中につぶされてその侭焼死んだものと考え、講義中だったという解剖学講堂に行ってみた。基礎教室のあった丘の上は全くの廃墟と化し、木造家屋は皆焼けて土台だけが、ポツンポツンと残っていた。

空には何百羽としれぬ鴉(からす)が腐肉を求めて舞っており、不気味な情景を呈していた。我々親子五人は教えられるままに解剖学講堂に行き焼け落ちて約一メートル高さ（三〇×三〇×一〇〇㎝）の土台が図の様な配置で残り、内側と外側の列の間に三～四つの白骨の小山が築かれていた。これは心細さの余り学生達が集まって焼け死んだのか、或いは方々に散乱していた白骨を誰かが集めたのだろうと思われた。

これでは誰が誰だかさっぱり判らないので、小山から少し宛白骨のかけらを拾っていたら、惇子が「ここにこんなものがあるよ」と我々を呼んだ。行ってみると講堂の中央に図の様に長方形の金属板が斜めに倒れており(多分入口のドア)、その中央に布切れが焼け残ってくっついていた。よく見るとそれは紺サージのズボンのホックのついている前の部分で、白い裏切れが表向きになっており、その端(はし)っこに「山本」と墨で書かれた字が見えた。

山本というのは僕の長姉（たまの）の独り息子で、九大医学部を卒業后海軍軍医として応召し、ラバウルに行っていた。その学生服を

貰って着ていたもので、当時学生は皆カーキ色の菜葉(なっぱ)服を着て、弘治一人紺サージ服を着ていたので、これに間違いないことがわかった。多分倒れたドアの上にうつ向きに寝て焼け、ズボンのその部分だけが焼け残ったのであろう。

これで弘治の死が確認され、「どこからかひょっこり帰って来るのではないか」とたのみにしていた望みの綱も切れ、がっかりして帰路についた。白骨は勿論その側から拾ったのである。

その後は力もつき果て、何をする勇気もなく、母や純子、子供達と互いに慰め、励ましながら、乞われたら被爆者を往診して診てやる数日間が続いていた。それものろのろと、まるで無遊病者のようによろめき歩きながら。

急性原爆症の発症

【九月三日～九月二十五日】

この間は僕が放射能症を発病して病床に臥し、危機を脱して大村海軍病院へ行くまでの期間である。

九月三日頃は、僕は全身倦怠がひどく、歩くことさえまともには出来ない状態であった。当時は疲労の為だと思っていたが、実は被爆による放射能障害であったのである。この日に大学本部から連絡があって、緊急会議の召集を受けた。大学再建に関する重要会議だったと思うが、内容については記憶がない。大村海軍病院へ移転のことは九月下旬まで知らなかったのだから（本誌(51)頁）、その事でなかったことは確かである。

この日はとても一人では行けないと思ったので朝子を伴につれて滑石を出た。恐らく道ノ尾駅から汽車で長崎駅まで行ったに違いない。駅から桜町の商工会議所（赤煉瓦二階建、昭和三十年代にこわされて今はないそこに大学本部があった。）へ歩いていく途中、多分今の小川町あたりだったと思うが、二〜三間（五〜六m）先に筬島助教授が歩いている姿が見えた。僕と同じくよちよち歩き（牛歩といった方が最適かも知れない）、追いつこうと思うがそれが出来ない。大声で呼ぼうとするが、それも出来ない。とうとう同じ間隔を保ちながら商工会議所に辿りついたことを憶えている。それ程筬島君も弱っていたのである。

桜町公園あたりの路上で熊本医大〇〇教授と立話したことがあるが、此の日だったかどうか確実ではない。又大雨が降って井樋の口あたりに大水が出て、止むを得ず目覚町の崖下の道を歩いたことがあり、下の川あたりの遠くでアセチレンが燃えてもうもうとした白煙を出していたことがあったが、それもこの日だったか他の機会だったか不確実である。然し僕は八月十二日以後、滑石から長崎に行ったのは二十三日（角尾学長の告別式の日）、二十八日（弘治の遺体探し）、九月三日（緊急会議の日）だけだと記憶しているので、この九月三日が最もそれらしく思われる。

九月四日（正確には三日午后か？）から僕は病床に臥し、起き上ることさえ出来ない状態になった。上腕内側と大腿内側に無数の栗粒大の皮下溢血斑を発見したのはこの頃である。純子には打ちあけなかったが内心大いに不安になった。今度は僕が死ぬのではないかと思った。その頃北村教授が縁先まで来られたので、出て行って斑点を見せたが、北村君も「私にもあるよ」と云って見せられた。至極元気である。純

子にもとうとう見られた。「多分蚤が食ったのでしょう。私にも小さいのが所々にありますよ」と云う。急に恐ろしくなった。朝子にビタミンCの静脈注射をやって貰った。咽喉が痛いのでカルシウム20ccの静注もやって貰った。注射の方法を教えながら入れて貰ったがとても上手にやってくれた。所が、その注射のあとも斑点になってなかなか消えない（朝子はその頃十四歳だったがよく静注が出来たものだと感心した）。

一週間程は腕や股の斑点を見つめながら、「僕が死んだらあとはどうなるだろうか、何か遺言でも書いておこうか」など考え、とてもつらい思いがした。食欲もなく、全身がだるくて、寝返りさえ思うようには出来ない。物を云うことも大きな声が出ないので、だまり勝ちになった。

一週間程たつと、先ず注射の針跡の斑点が少し色が薄くなったように思われた。詳細に点検したが、小さい斑点から先に色が変って紫色から青色、黄色と少し宛（つつ）変色することも確かめられた。「ひょっとすると助かるかも知れない」と考え出したのは九月十二〜十三日頃からだったろう。

九月十六日頃だったか。藤井浩君が、ビール瓶に牛骨のスープを一杯つめて持って来てくれた。それが大変おいしかった。その日だったか、別の日だったか忘れたが、恐らく藤井君が、血球計算器を持参して僕のを測定してくれた。その成績は赤血球が三五〇万、白血球が二四〇〇ということであった。

その頃の或る日、医専三年の香田君（九日に高木教授をかついで丘の上に来た学生）が突然やって来て、一晩泊めてくれという。「うちでも子供が二人死んで淋しくなったから結構だよ」と云って泊ること

になったが、よくしゃべる男でひっきりなしに話をする。初めは少し相手になっていたが、あとではうるさくなり、少し止めて貰いたいと云いたい程だった。

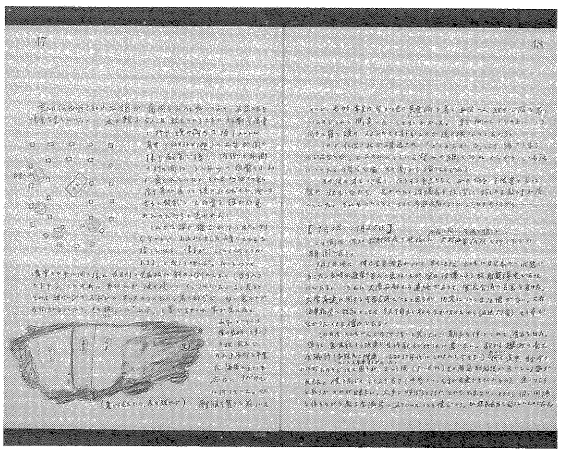
その香田君が土間においてあったアルコール瓶を見つけ出して、「先生、これを飲んでもいいですか」ときく、「死んでも知らないよ」と云ったが、彼は美味しそうにブドウ糖を點加して飲んでいる。「先生も一杯いかがですか」というが、自分は今肝臓がやられているに違いないから、アルコールは駄目だろうとは思ったが、余り勧めるので、ブドウ酒用の小さいグラスに少量のアルコールを入れ、その上からアンプレ入りのブドウ糖を注いで倍位にうすめ、少し宛なめるように飲んだが、とてもおいしかった。何だか体が温まるようで、話にも元気が出たようだ。これはいいなと思い、朝夕、食事の時に小コップ一杯宛飲むことにした。そのせいか急に元気が出て来たようだ。純子も「大変顔色がよくなった」という。平素嫌いでもない酒で病気が治るのだったら、こんな嬉しいことはない。土間に放ったらかしになっていたアルコールが急に大切な品物に見え出した。全く僕にとっては救いの神様みたいに思われだした。本当に生気をとりもどして、これなら大丈夫だと思ったのも、これをやり出してからである。そして九月二十日頃には最早腕や股の斑点も消えていたように思う。但し皮膚の色はまだ本当でなく、艶もなく、鳥はだがたったようで、チリメン皺がより、熱は大して出なかったので汗も気にならなかったが、何となくパサパサした皮膚だったようである。

死地を脱した僕は四尺氏宅でぶらぶらしながら色々の事を考えた。自分だけは漸く一命をとりとめたものの、精一と弘治の二人は、あたら青春を謳歌することもなく再び帰らぬ人となった。これで調家はどうなることであろう。それよりも先ず灰燼に帰した長崎医科大学はどんな運命を辿るであろうか。再建されて再び職に戻ることが出来るであろうか。悶々として一日として——否寸時も晴れやかな時はなかったのである。そして大学を訪れる元気も、勇気もなく、九月二十四日となってしまった。（以下(51)頁に続く。昭和四十五年七月二十三日朝記）

精一と弘治の戒名は次の通りである。

精一　智照院釋精進居士（昭和二十年八月十六日歿）享年二十歳……満十八歳九ヶ月

弘治　惇心院釋弘道居士（昭和二十年八月九日歿）享年十八歳……満十六歳十ヶ月



大村海軍病院

一、本院へ来院の顚末

自分が初めて大村病院が大学へ貰えそうだとの話を耳にしたのは、九月二十四日夕方長崎からの帰りに立寄られた北村教授からであった。同教授の話によると、「泰山海軍病院長（少将）が長崎医専の出身である関係上、医大の将来に対し、全力を挙げて奮闘され、米軍と折衝の結果、同病院は接収せぬからこれに長崎医大を移して medical center にする様にとの事である。その為には一人でも多くの教授、助教授、助手、学生達が大村病院に泊り込んで、戦災者の診療並に研究に従事して置いた方がよいから、北村教授と一緒に保養旁々行くように」との事であった。期日は九月二十六日、大村から新興善国民学校に収容の患者受取旁々バスが来るから午后一時迄に新興善に行けばよいと云う。勿論承諾の旨を伝えた。同夕森君もやって来て同行を希望した。私も是非そうして貰いたいと返事して置いた。

【九月二十六日】

二十六日午前九時森君が立寄って呉れたので病歴用紙血球計算用メランヂュール其他身の廻りの品を用意して十時に滑石の自宅を出発し、十時五十六分の下りで長崎に向った。道尾駅で北村教授にも会った。

新興善国民学校につき、医局で中食をすまし、同校の假救護所で診療の手伝いをして居る学生の案内で二階の病室を一巡し Kranke を二、三人診てやったり、Wunde の説明やらをやる中、時間も来たので医局へ戻り、影浦教授の到着を待った。大村海軍病院から赤十字の mark の入ったバスが二台とトラック一台とがやって来た。学生達が患者をバスへ運んで居ると「今日は患者をつれて行かぬ様と医師会の人が云って居られる」と僕等の所に伝えて来た。何の事か判らぬので、影浦教授の到着迄待つ様にと返事して置いた。

(51)

ややあって影浦教授到着、すぐ市医師会長高尾氏との交渉の結果は次の如くである。即ち「近くこの假救護所が閉鎖になるそうだ」と云って患者達が動揺して居るから、市としても患者を不安にする様な事はせぬ様に注意された。今日丈連れて行くのを止めて呉れ」と云うそうである。当方では希望者丈を連れて行くのであるから何等差支ない様ではあるが、裏にはデリケイトな事情もあるらしいから兎に角、我々丈行くことにしようと影浦教授も云われる。其中雨が降り出した。

一回かつぎ出した患者も又二階に戻し、バスに乗って居たものも降して、唯医専三年の浜崎君と北郷君の父上丈を同行することとして二台のバスには学生及看護婦二名が分乗し、トラックには書籍をつんで運ぶこととして午后二時新興善を出発した。

矢上を通り、途中米軍のトラックにも出会って雨の中を大村海軍病院についたのは午后四時頃であったろう。直ちに米軍の調査団長 Barnett にも紹介され、夕食を馳走になり、第八病棟二階の宿泊所に引取り、各小室に教授、助教授、医局員、大室に学生が寝ることとした。既に先着の学生や看護婦もあり、兎に角今日集ったものは教授三、助教授一、助手及副手六、学生六、看護婦三、であった。

九月二十四日着　長井（医三）土山（医三）田尻（医三）中村（謙二）（医假卒）

九月二十五日着　川下絹枝（角尾内、看護婦）吉武マサコ（耳ビ科看）

(52)

九月二十六日着　影浦教授、北村教授、調教授、佐藤助教授、森（調外）二木（婦人科）古閑（影内）小柳（影内）中村（国）（角尾内）黒木（皮膚科）橋本（学四）須山（学、假卒）岸浦ケイ（眼科看護婦）

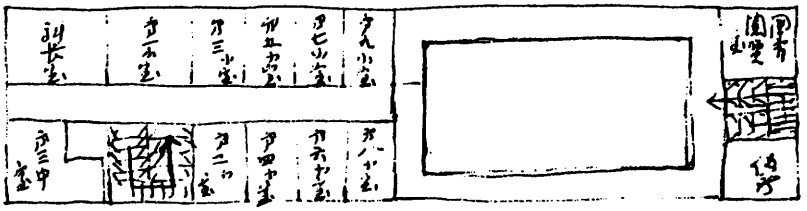
須山、中村（謙）両君は本年三月假卒業で、海軍短期軍医となり、本院に勤務中九月一日解除となり、再び本院に軍籍を離れてまい戻ったものである。本院の様子をよく知って居て却々都合がよい。

夕方小児科の書籍がトラック一台に満載されて来た。階上の廊下のテーブルの上に乗せて置いた。佐藤助教授はこのトラックでやって来た。

二十六日夜から翌朝にかけて、影浦教授及泰山院長より聞いた本院大学移管の顚末は次の通りである。

長崎医専出身である泰山少将が、長崎医大の将来に対し大いに心配し、是非何とかして早く再建の道を講じたいとの念願からそれには大村海軍病院を敵の手に渡すことなく大学に移管するのが最もよいと考え屢々、古屋野教授へも建言したことがある。併し海軍病院なるが故に敵に接収される惧れが多分にあるので古屋野教授は初め多少逡巡（シュンジュン）したが、原少佐（長崎医大卒、衛生教室で仕事した海軍々医）も大いに力説した為、若し敵の接収を逃れた場合は是非長崎医大に貰える様、保利医務局長（長崎医専卒、過日学位も長崎医大で審査した人、海軍中将）へもお願いの書類を去る九月十四日、医大假本部（商工会議所二階）に於ける、緊急協議会の時も出して居られた様である。

所が一方九月二十日に影浦教授の同期生で目下厚生科学研究所員の職にある石川千福氏が長崎に来られ、翌二十一日の朝、影浦教授と会見された時も、長崎医大の将来に就て話が出、同氏談では「とてもぢっとして居ては埒（らち）があかぬから、こちらから働きかけないと物にならぬ」との注意もあり、影浦教授は古屋野教授とも相談の結果、二十二日に大村海軍病院に行き、泰山少将と会見されたとの事である。当日は土曜日で最早院長は帰宅されて居り、却って外の医官が居なくて都合がよかったと云われる。



当日の談合により、出来る丈沢山の患者を収容し、出来る丈多くの教授以下職員が出かけて行った方がよいとの事でその準備中、二十四日日曜の朝、泰山院長は自らトラックに乗って長崎に出張し、高瀬、影浦教授と共に新興善国民学校に行き（午前十一時）市医師会長高尾氏と面会し、長崎医大復興のことにつき、協力方を懇願し、収容中の戦災者中希望者を大村海軍病院へ輸送する事を申出た所、高尾氏は快く承諾し、自ら学生（長崎医大より手伝いに行って居るもの）達を集めて、大村海軍病院における医大再建のことを話し、「同病院は建物も広く設備も完備し、食料等も十二分にあるとの事だから、其事を患者に伝へて希望者をつのって呉れ」と申渡されたそうである。

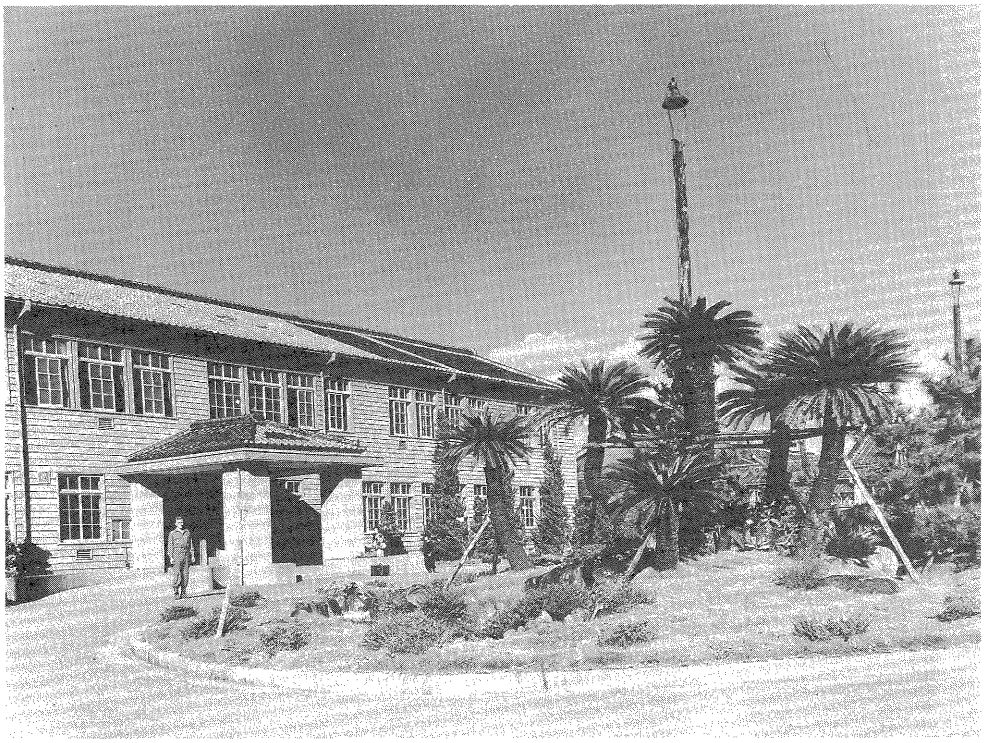
（影浦教授談）而も当日午後一時にバスが来るのでそれ迄に希望者を集めて呉れと申込んだのに対しても快諾して、兎に角、患者十数名と学生（長井、土山、田尻、中村謙二）とを乗せ、楠井助教授が引率して大村海軍病院に向った。

一方、泰山少将は、米国側よりYoungが大村に来てるとの報に接し、「それは自分が行かなければ到底駄目だ」と云って、急遽大村に引返されたとの事である。帰ってみるとYoungではなくて其命を授け（海軍）軍医中佐のDicksonが来て居りこれと色々話された訳である。Dicksonとの会談は誠に効果的で、彼は泰山院長に此病院は米国で接収しないからmedical centerにして、一刻も早く長崎新興善校に居る戦災患者を移して治療してやる様にせよ、それでないと患者達がmiserableだと云ったそうである。泰山院長も前から古い歴史を持った長崎医大が全滅して居るから、この病院を提供してそれを再建する積りだ、と述べて話は一応それに決定したと云う。

(54)

翌二十五日、楠井助教授は其報を持って長崎に帰り、影浦教授に会って「大変なことになった。米国側では大村海軍病院を接収しないでmedical centerにせよと云ってる」由を伝え、更に新興善の患者を大村へ送る様にとの事で、又二十名内外の患者と看護婦二人（川下、吉武）をバスで大村へ送ったと云う。北村教授が此話を聞いて来たのは二十四日泰山院長が単身長崎へ出かけて来た日で、第一日患者輸送の時である。二十六日にもバスで患者を大村へ送るので、それと一緒に行く様にとの事であったので、朝十時五十六分の下りで長崎へ行き、新興善に直行して、一行と行を共にする事を約した訳である。（前記の通り）

(55)



大村海軍病院

二、大村海軍病院での第一日

自分達が大村病院についたのは九月二十六日午後四時であったが、其日は米国原子爆弾研究団 Barnett 外数名に紹介され、海軍の将校食堂で夕食を馳走になり、夜は影浦教授の寝室で九時頃迄色々の事を話し込み（前記の事項）十時頃消燈して寝についた。余の寝た部屋は第一小室で三間×二・五間位の部屋、ベットが二ツ入れてあり、初め北村教授と二人寝る積りだったが、北村教授が遠慮されて、第四小室に移られたので其侭になってしまった。

【九月二十七日】

明くれば九月二十七日、今日が大村海軍病院に於ける第一日とみても差支ない日である。

朝食后に学生寝室の南側廊下にテーブルがあって学生達は其侭で食事をとるのであるが、食后に僕等も行って今後やるべき事を協議した。今の所居候みたいな状態で診療検査全般を引つぐ訳に行かないので、軍医指揮の下に諸種の検査をやる事を申渡し、先ず病舎によって受持を作ることに決めた。

受持は、大体次の通りである。

第一病舎　戦災患者　約二十五名　森、中村謙、田尻
第二病舎　〃（内科的）約二十　名　古閑、小柳
第三病舎　〃　約三十　名　黒木、橋本
第四病舎　〃（外科的）約三十五名　須山、長井
第八病舎　〃　約四十　名　森、中村謙、田尻
第十五病舎　〃　約二十五名　中村匡、土山
第十一病舎
第十三病舎　伝染病患者　約百　名（受持なし）

次で福原医官（少佐）の案内で病舎を一巡した。瀕死の重症患者は少い様だ。ベットも綺麗だし、病室も実に angenahm だ。中でも第三病舎が最もよい。浜崎君は第三病舎の孤室に入った。第三病舎には女の Darumstenose らしい患者が居る。戦災後だそうだから Blutung の為に来たのかも知れない。手術したいものだ。

廻診后、北村教授と二人、院長に呼ばれ Barnett に面会した。大学の状況を聞きたいと云う。感じのよい男で襟にⅡの字の mark をつけて居る。院長の通訳で色々話した。第一に戦災前の大学の教授数、死亡数、学生の数、其死亡数、患者の数、其死亡数、等であった。教授数は二十、死亡十二、学生数は約八百五十、死亡数六百五十、患者数は外来と合せて約三百、死亡数百五十等と答えて置いた。それから僕と北村君の罹災状況を聞いたので Späterscheinung のことも詳しく話してやった。序に学長の死亡迄の病状経過を話してやった。Barnett は一々書き止めて最后に大学の図面を書いて呉れと云ったので、北村教授と評議の上、午后に書いてやった。英語で書き込むのには弱った。夕方それを持って行くと、大変に感謝して更に縮図を書いて大学の位置、刑務所との関係、山との関係等を書かされた。又僕等の遭難の位置も書入れさせられた。帰りに他の背の高いのが Lucky Strike と云う二十本入の煙草を呉れたので Thank you と云ってやった。

古屋野教授は本日（九月二十七日）午后雨の中を海軍病院のハイヤーで来られた。第一部長が迎えに行った様だ。其時佐藤助教授も同乗して長崎に帰った。二木君も寒いから仕度をして来ると言って同乗

して行った。影浦教授は諫早に行く日だから諫早迄と云って行かれた。外に新来の学生も患者もない。午后古屋野教授と北村教授と三人で院長室で色々の報告や話をやって居る時、外では院長が大きな声で米国人相手にシャベッて居る。後になって聞いたのだが、米国の軍艦から銃剣をもった兵迄つれてこの病院を接収に来たそうだ。院長は孤軍奮闘し、一切の事情を明らさまに告げてとうとう追拂ったとの事である。Barnett外の研究団が居た事が大変役に立ったと云って居られた。其最中に諫早海軍病院から電話がかかり、米軍に接収されるので職員と患者とを受取って呉れと云って来たそうだが、院長は患者は受取るが、職員は其方で適当に復員せよと云ってやったと云う。今日は日本軍を撃退したとは誠に感慨無量の言葉だった。大村の共済会病院も解散になるので、患者を受取って呉れと云われ、それも受諾したとの事であった。泰山院長は丈は小さいが却々精悍な人だ。

夜になると学生達はとても愉快そうだ。蓄音機を何処からか持って来て、かけて楽しんで居る。其側に将棋の駒があったので、中村匡君とやってみた。久し振りだ。風呂は手術場の風呂で気持ちがよい。浴后暫らく北村教授方と話し、八、九時頃から自室に入って書き物などして十時頃寝につく。今日は毛布が純白で更に気持がよい。

【九月二十八日】（金）　快晴

今日は昨日の風雨に引かえ、からりと晴れた秋日和で気持がよい。朝古屋野、北村両教授と三人で院内を散歩し朝食、Sektions material を見せて貰う。米人が其中から面白そうなのを持って帰ると云って選り出して居た。昨日は煙草を呉れた男で台が低いのでかがむと腰が痛いと笑って居る。

福原少佐は写真器を携へて長崎に戦災地の撮影に出かけた。それに随伴して須山君が行くと云うので本部に立寄り影浦教授に会って何日に戦災患者受取のバスを出してよいか聞いて貰うことにした。

第二病棟では外人が患者の Blut の検査をやると云うので其手伝をして居る。

午后古屋野教授は定期のバスで大村市に行かれた。市長にお礼の為行くのだそうだ。其留守に米の Shelber とか云う物理学者が北村教授と僕に面会したいと云う。会ったが、言葉が少しおかしいので判り難い。空襲后に田舎から出かけて行ったものが同じ病気にかかったと云ったら、びっくりして居た。彼等は皆原子作用は瞬間的であると主張する。それでは爆心地に長く居た者と、すぐ離れたものとの傷害の程度の違うのがおかしい事になる。「面白い話をきいてありがとう」と愛きょうをふりまいて別れた。

食后 Barnett が会いたいと云うので、北村教授と二人行ったら、原子爆弾の作用を又説明して居た。作用は瞬間的だが、dust 塵挨等についた γ 線は、雲となって風と共に移動する、長崎では爆心地から東の方に帯状に γ 線の濃厚な所がある、だから其処に居るものに或いは病人が出来たかも知れぬから、調査したらよいだろうと云って居た。その時自分は、爆発直後には、風が西から吹いて居たから其所見と一致する事を述べて居いた。

夕方ひょっこりと横山薬専教授と一ノ瀬教授とがやって来た。夕食は五人でやったが、今度は今迄の士官食堂とは別の部屋だった。夕方、古屋野教授以外の四人で海岸迄行ってみた。子供が岸からタコをつって居る。見て居る間には一疋もつれなかった。静かでいい景色だ。こんな所に住んだらさぞ結構だろう。明日は土曜なので、森君、小柳君

は古屋野教授と共に帰宅するそうだ。横山君は大学へ本とりに、一ノ瀬君も一諸に帰るとの事。明日は急に淋しくなる。今日張君（医假卒）来る。

今日 Barnett 及他の一人の米人から新原子の名を聞いた。Uranium に次ぐ九十三番の原子が Neptunium、九十四番が Plutonium である。広島には Uranium が使用され、長崎には Plutonium が使用されたらしいとは仁科博士の言である。Uranium が二三八・一四の原子量だから他の二原子はもっと多いであろう。

【九月二十九日】（土曜日）　快晴

朝一寸曇りかけたが又晴れた。今日、古屋野教授を初めとし、横山教授、一ノ瀬助教授、森、中村、小柳、橋本が長崎に帰り、長井君は本受取りに出かけた。午后自動車の帰便は本ではなくて、顕微鏡七～八台と、アルコール六〇罐とを持って来た。それに浜田助教授と学生の野口（学三）園田（学三）河村（医三）が来た。外に汽車で島成助教授も来たので却って賑やかになった。明日よりの受持を次の通りにした。

一、八病舎　森、中村謙、田尻
二　〃　古閑、河村
三　〃　黒木、野口、園田
四　〃　須山、長井
十五　〃　中村匡、張、土山

朝、須山君と一緒に第四病舎に行って、藤原君の傷を見る積りだったが、序にと云うので全部の患者を見せて貰い、且つ交換の手伝をした。藤原君の傷は吃驚する程なおり、offene Fraktur だったのが Wunde は殆ど治癒して居る。Rachen も諌早で Diphtherie をやったと云うのに Befund は全くない。多分本当の Diphtherie でなしに原子弾の為の Tonsillenschwellung であったろう。

交換がすんで、須山君に原子爆弾患者の list を作る様お願いした。書き込むことは、姓名、性及年齢、受傷場所、傷病名及部位、着物、建物（内外、種類）病状（意識喪失、嘔気、嘔吐、疱疹、下痢、血便、斑点、歯齦出血、喀血、高熱、口腔炎、咽頭痛、脱毛、其他）、尿所見（蛋白、糖、Urobilin, Urobilinogen）、血液所見（血色素量、赤血球数、白血球数、白血球像、血沈）、転帰、備考の項目に分けた。

来週中に現入院患者をやり、これがすんだら死亡及退院の患者をやって呉れる様頼んで置いた。これは四病舎に限らず全患者にして貰いたいと思う。

十時に交換をすまし、直ちに病的検査所に行き組織切片の製作にかかった。Paraffin が硬くて切れない。少し方法をかえて自己流にしたいと思った。今度帰ったら Toluor（トルオール）や本を持って来よう。

十一時半に午前の仕事をすまし、中食、食后に陸軍病院の深堀君（大学の薬局に居た人、応召して大村陸軍病院にあり）及谷本君（昔大学レントゲンに居て後佐世保で開業、一年前応召）の二人が訪ねて来、一時迄話し込む、院長は相変らず藤沢君との事。明日午后訪問を約して別れた。

一時より又病理室へ行き、切片を作ったが、どうもうまく行かない。半分で止めようとして居る時、電話で院長に呼ばれた。行くと東大の都築教授が来て居られ、外に研究団一行、米人研究団等が来た。都築教授は日本の原子爆弾傷の研究会を代表し、長崎より東方の金比羅、

(60)

(61)

矢上、網場、千々石、島原各地方の調査を依頼したいとの事であった。其中、千々石と島原は九大に頼み、其他を長大でやる様決定した。

其頃、藤沢君来訪。酒一升、缶詰、ビスケット、煙草等の土産を持参して来た。暫く古屋野教授の居た科長室で話す。藤沢君は（大村陸軍病院長、中佐、京城帝大時代の教え子）十月一杯で軍籍を離れるが、尚軍戎保護院の医師として残ることを希望して居る由。

やがて又電話で院長室によばれた。行くと枝坂老人と西川大村市医師会長が来訪されて居た。暫らく話す。夕食后、学生一同に東大研究団来訪の話をし、自重して大いに働らく様命じた。

午后長崎から本の代りにアルコール罐と顕微鏡がついたので食后それを薬品倉庫に運び、褒美として今日貰った酒を馳走し、我々も四人（北村、浜田、筬島）で罐詰（サケ）をあけて一杯飲む。会議室では西洋人一行及院長、都築教授達が、夕食且一杯傾けて居る様が手にとる様に見える。やがて北村教授と二人で来る様にとの使が来たので行くと Warren 大佐が来て居て Barnett が紹介して呉れ、二階に居た人、三階に居た人と云いながら握手した。大勢の人にも紹介された。次で Warren 大佐が一場の話をした。

それによると原子弾傷は日本と米国学者が共同で研究し、それを各自保存して置く様、後に研究団の名の下に発表することとなろう。一次症は混乱の場合であったから、調査が行きとどいて居ない。二次症は分り易かったが、これから先が又難かしくなる。この傷害は相当長く続くものと思われるから、続けて研究する様にとの事であった。又建物の種類コンクリートの厚さなどを正確に記して置く事も大切なことだと云う。九時一同解散、日記を記して寝につく。

【九月三十日】（日）

朝、泰山院長があたふたと我々の所に来て Warren と都築教授が飛行機で東京に行くそうだから此際古屋野教授も東京に行って呉れたらよいのにとやきもきして居た。それも然りと云うので、自分は今日午後藤沢大村陸軍病院長を訪問する予定を変更して八時半のバスで長崎に向った。

先ず影浦教授を本部へ引出して、一通りの話をし、次で新興善によって学生を集めた。新興善では米国の Doctor が来て開業医達に薬の説明をして居た。自分は此時初めて dried human Plasma を見た。次で古屋野教授宅を影浦教授と二人で訪問したが、生憎留守だったので影浦教授丈が残って話することにして自分は又バスに乗った。バスは大学に行って、酒精罐及書籍を持って大村に帰るそうだが、自分は浦上駅前で降して貰って滑石の自宅に帰った。大雨の為ずぶ濡れとなる。

【十月一日】（月）

本日も雨。洋服及靴が乾かず、外に少し準備もあるので一日休養することとした。午後北村教授夫人来訪。

【十月二日】（火）

十時五十六分の下りで長崎へ行く。道尾駅で森君に会う。川棚へ行き続きに大村へ行くと云う。

長崎駅につくと丁度大村病院のバスが大学の方面へ向って居る。トランクと傘を託し、自用をたすべく本河内及鍛冶屋町に行き、一時半過新興善に行ったが、バスは既に本部に行って居たので本部に向った。本部には北村教授も来てあり、佐野教授をつれて大村へ行くとて其

到着を待って居た。小浜の宮城君の顔も見えて居た。影浦教授は本朝大村へ行かれた由。「バス」は佐野教授を伴って午后四時過大村についた。

病院では留守の間に沢山の新事態が発生して居た。影浦教授及北村教授の話を略記すると次の如くである。影浦教授・知事が度々古屋野教授に会見を申込んだが互に差支があって会えず、古屋野教授は其侭大村へ行ったので、月曜（十月一日）知事の希望により面会してみると「大浦の陸軍病院は赤十字病院にすることになったから残念ながら大学にお渡しすることは出来なくなった」との事である。其理由は判然しないが、軍から赤十字にやれば接収もされずにすむし、又薬局材料も其侭使えるかららしい。併し、それは県の方針だか軍の方針だかどうも判然しない。兎に角、陸軍病院を大学に貰う望みは全くなくなった訳だ。

北村教授の話は、都築教授が長崎へ行っての話では、陸軍病院を長崎市の病院に、大村を県の病院にして大学でやったらよいだろうと云う話が、知事や米国側との話の間に出たとか云うことだったが、それも都築教授の一存で大して意味のある話ではないらしい。東大教授が長崎医大の再建に対し、それ程重要な発言権を持ってる訳のものでもないので、自分もいい加減に聞いて居たから真相は判らない。

尚、其節次の話題が出た。

一、九大に教育を頼んだ　学部一年、医専一、二年は八日に九大に集（あつま）ることにしたが、こちらからも誰か行って訓辞なり、お願なりしなければならぬだろう。それには古参の高瀬教授が適任だから、若し大村に来られたら、頼んで呉れる様にと影浦教授の話であった。

二、十月十日及十一日に九大で、今度復員になる陸海軍学校生徒を大学及附属医専に受入れる件につき会議があるが、それには高瀬教授が都合が悪ければ影浦教授が出席すること。但し、受入に就いては教育を九大に願はなければならぬので、九大と打合せて其許可を受けねばならぬが、長崎医大としては、卒業生を多くする意味で出来る丈お願した方がよいだろうとの説が出て居た。

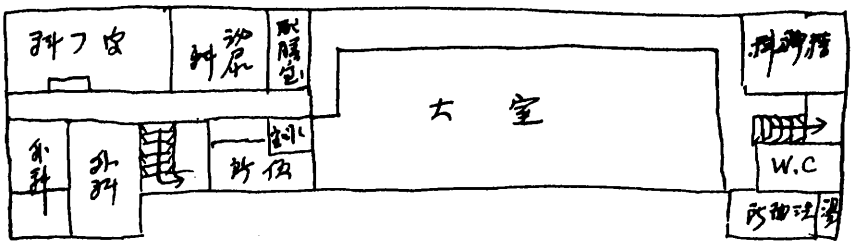
【十月三日】（水）

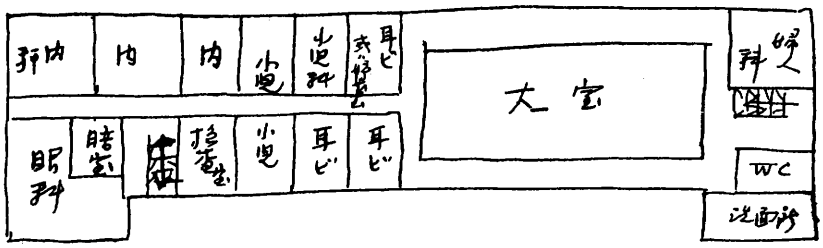
今日、北村教授は長崎の自宅に帰られ、影浦教授は大村市長に面会の為、大村に病院の車で出かけられた。其前に泰山院長の提案で、来る五日から開院することになった外来（第五病舎）を検分した。大体一、二階の小室及中室丈を使うこととし、自分が図面を作って部屋の割当を作った。凡そ次の通りである。

先ず内科、外科、小児科、皮泌科丈を開設することとした。それは、教授が居られる為で、其他は教授来着次第適宜開く積りである。

夕方、このPlanを泰山院長が持って行かれた。多分ベットの片附其他を命ぜられる為であろう。看護婦は十二人丈赤十字のを借りることとした。

米軍進駐の噂が出た時、急に退院させた原子爆弾負傷者四五七名の生死を調査する様、影浦教授が泰山院長に依頼されたので、一部を僕が引受け、原籍を借りて整理することとした。長崎の焼跡が住所になって居るものも居て調査は困難であろう。





【十月四日】（木）

本朝、影浦教授は諫早へ行かれ、続きに長崎へ帰られた。午后、横山君と二人宿舎に居ると、突然高瀬教授が来院され、嬉しいニュースを耳にした。次は高瀬教授の話である。昨三日に陸軍病院の古賀院長から手紙が影浦教授宛に来て居たので、事務官と二人で開封してみた所、至急一寸面会したいとの事が書いてあり、影浦教授が留守なので、自分が行ってみた所「陸軍病院はこれを赤十字へ渡す様に話が決っていた所、県知事の話では赤十字へはやらぬ事になったので、若し大学が希望するならば、市長と相談して使用して差支ない」との事であった。尚、古賀院長は福岡西部軍によばれて居るが、多分兵隊復員の事であろうから、若し陸軍病院が看板を降す様になればそれと入替に大学病院の看板をかけ、患者も教室員諸君も今からでも来て居た方が都合がよいだろうと注意したとの事である。

所が翌四日（本日）高尾市医師会長と中山衛生課長が本部にやって来ての話では「新興善国民学校は進駐軍が接収して、これを市民病院とし、一般患者を診療する様にしたいが、それを高尾氏に経営せよ」と命じたそうで、其時高尾氏は「自分は一開業医で微力だから出来ぬ、幸い長崎医科大学は病院も大学も焼けて診療所がなくて困って居るから、大学にやらしたらよいだろう」と答えた所「それなら責任者に明五日午前八時半に会おう」と云ったそうである。で影浦教授に明朝進駐軍本部に行って貰いたいと連絡の為来られたとの事であった。とたんに自分は大変嬉しくなった。古屋野教授が市長に交渉された時は無下に断って置きながら進駐軍から云われれば、一も二もなく其通りになる。出来たら此手を大村海軍病院にも応用して貰いたいものだ。

大倉君が長崎に帰ると云うので、自分が影浦教授に手紙を書いて、

明朝間違いなく行って貰いたい。其時即座に大学で引受ける様して貰いたい由を伝える事とした。此事は高瀬教授及横山君とも話し会った協議の結果であった。手紙を書く時、泰山院長にお話しなくてもよいかどうかを考えたが、それは影浦教授から話して貰うこととし、兎に角　大学としては多少独断の嫌はあるが、二つ返事で貰ってしまった方がよいと考えた次第である。

高瀬教授と大倉君は五時の汽車で帰られた。昨日影浦教授から頼まれた事を話したが御母堂が Nephritis で重態だから影浦教授に福岡に行って貰う様にしたいとの事であった。

高瀬教授の出発後に北村教授が長崎から帰院された。早速今日の話をして喜を共にした。

午前中、外来予定の五病舎に行くと兵隊がベットを片付け中で、看護婦達も掃除に来て居た。婦長は藤本と云い全部で十二人、藤本婦長へ各科の備品等の設備をお願いすることとし、須山君を呼んで来て二人で診療用具の選定をした。愈々明日から開所だ。北村教授へは部屋の割当を話し承諾を得た。

夜に通訳達と風呂が一緒になったので Barnett が東京に行く由、真相を聞いてみると東京から続きに米国に帰るそうだと云う。

夜に私室に遊びに行ってもよいかと云うと、結構だとの事だったので、北村教授、横山君と三人で第二海仁寮を訪問した。大変喜んで呉れて Barnett, Whipple, Howland, Brundage の四人と廊下のテーブルを囲んで話した。勿論通訳をつけて話が六ヶ敷くなるとやって貰うことにした。席上自分は先日持って来た能画（色紙）其他を持ち出し、能画の色紙三枚（羽衣、鉢の木、岩船）と日本画色紙二枚、能及謡曲扇二本を Barnett に与え Howland に普通日本扇一本を与えた。

大変喜んで居た。話は米国医学校の話、病気の話、時には冗談迄出て十時迄面白い一時を過した。皆は本国へ帰ることが大変嬉しそうで大はしゃぎだった。これで日米親善の役目を果した様にも思う。

【十月五日】（金）

朝九時頃 Barnett の一行が出発すると云うので、玄関前に見送りに出た。天気は上天気、沢山の荷物をトラックにつんで嬉しそうな顔で出かけた。出発の前に長い紙包をくれたので Penicllin にしては大きいと思って居ると、それは煙草だった。切れかかって居た時なので嬉しかった。心から thank you を云ってやった。横山君も貰って居た。北村教授は丁度不在だったので、横山君を呼びにやってる中に、北村教授への煙草も Barnett から託された。Barnett は早くから僕の名も覚えて居て呉れて親しみのある男だった。

見送りの最中に大村の長崎新聞支局長の多島氏が面会を申込んだ。北村教授と二人で会ってみると長崎医大が大村に移ることについての話で今朝の新聞に出て居た記事により、我々にさぐりに来たものらしかった。今朝の新聞には長崎医大の大体の方針が決定し、医科の低学年は九大に、薬専は佐賀高等学校に、医科高学年は大村に来て講義も開始し、外来診療も始めると云う記事が乗って居た。多島氏は大村としても大学と協力し是非この病院が大学へ貰える様尽力すると述べて帰った。十時頃から外来へ行ってみたが、患者が二人、共に内科の患者だったが、内科の人が居ないので自分が代りに診てやった。午后又用があって行ってみると又一人来て居る。Arteriosklerose による Arterienverschluss の患者で Therapie としては machltos だが面白い興味深い Kranke だった。外来に一人ずつ当直を置く事にした。

これは海軍病院部長の意見で（外来の黒板に書いてあった）兵隊中に悪いものが居て、当直がいないと備品等が紛失する惧れがある為であった。今日は須山君に初当直を頼んだ。これで外来も大体目鼻がついた様だ。

午后佐野教授来院。影浦教授は長崎に帰られず、今朝の予定が間違ったとの事で僕等は大いに落膽したが、それは明朝でもよいだろうとの事だったので、明日は是非行って戴く様皆で心ひそかに祈った。

書き忘れたが、昨日森俊夫君が川棚から来院して川棚院長（大佐）をつれて来た。川棚病院（共済会）は目下海軍省当局に「病院として存続させ、軍戎保護院とするか、県病院にするか、長崎医大あたりに買って貰うかしたい」希望を具申して居ると述べ、大学で引受けて呉れないかとの交渉に来たのであった。

自分としては（北村教授不在）責任を持てないから、古屋野教授帰任の上返事する由を述べて別れた。何でも共済会は財団法人だから、其方面から出した金（約五十四万円）丈は出して貰いたいとの事であった。川棚では病院としても基礎教室としても余り面白くないので二つ返事で貰う程のものでもなさそうだ。但し大村が貰えない暁には又考えなおさねばならぬかも知れない。

三、新興善小学校の医大移管決定

【十月六日】（土）

外来には眼の悪い赤坊が唯一人来た。佐野教授に診て貰った。佐野教授は御令嬢が赤痢様の御病気だとかで、薬を持って夕方帰崎された。

夕方北村教授と二人居ると、泰山院長が息せき切ってやって来られ、

本日佐世保海軍病院に呼ばれた顚末を話された。昨日の新聞記事がたって、昨夜使が来て出頭せよとの事で、行ってみると「大村は軍戎保護院とする、大学などにはやらない。何故学生を宿め外来などをやるか」と叱られたそうである。院長は「原子爆弾研究の為に来て居るので、外来を始めたのも皆原子弾の影響調査の為である。この研究は東大、九大、長大の三大学でやるので、東大、九大からも来て居るが人数が少ないので、長大の学生達が協力して居るのだ」と云って来たそうで、学生の宿舎にも「原子爆弾研究員宿舎」の札を貼りましょうと云って居た。尚、佐世保の長官は「医学校など不必要だ」などけしからぬことを云って居た。一体大村の海軍病院が米軍の接収を免れたのは誰の為か。日本海軍では軍医を一ヶ所に集めて軍人を治療しようとすることが既に間違って居る。自分は軍をやめたら代議士となって大いに戦ってやる積りだ等、大気焔を吐いて居られた。全く泰山少将の長崎医大に対する献身的の奮闘には頭の下る思いがする。院長の話によると大村海軍病院は十一月一杯海軍として存続し、院長は十五日で交替となり、泰山少将の代りには大佐の人が来て（熊大出身）部長二人も十五日に更迭になるそうだ（共に長大出身）。十二月一日には厚生省に移管になるかも知れぬが、大学は手早く交渉して厚生省から貰ったらよいでしょうなど云われた時は実に心細い気がした。夕食后北村教授と影浦教授を乗せて来る筈のバスを迎ひ旁々東浦方面を散歩したが、バスはとうとう帰って来なかった。

夜に入って影浦内科教室の森沢君が来て僕宛の教授の手紙と言伝（ことづて）を渡した。それは、新興善校を大学で貰うことに決定したから明後日高尾氏と進駐軍本部にPlanを持って行く様にとの手紙であった。僕が院長に目されて居る関係で書かれたものらしい、教授は明日出発して

福岡に向かわれるとの事。

新興善が確実に大学のものとなったのは嬉しかった。泰山院長には明朝お話して二人で長崎へ出発することを約し寝についた。

横山君は八日から学生が大村に大勢来ると宿舎がせまくなるから移転したいと一人で大童になって居た。九病舎及十病舎を北村教授と三人で検分し、九病舎二階を教授室、大室を講堂兼食堂、階下を教室員（小室及中室）と学部学生の宿舎とし、十病舎は助教授諸君（二階小室）及医専学生の宿舎とした（階下大室）。今明日に掃除して移転を完了する様学生の須山及中村に云い渡した。午后九病舎に行ってみると六、七人の学生と二、三人の看護婦とがベットの整理（十病舎に移すこと）で盛んに活躍して居た。須山、中村、長井、土山達は何時も実に真面目に働く。

【十月七日】（日）

朝、北村教授と二人で泰山院長に会い、今日長崎へ急行すること及其理由を差支ない程度に話し、八時半のバスで長崎へ向った。

先ず新興善に行き高尾医師会長に面会し、新興善移管問題につき協議し、影浦教授と高瀬教授とが二人で書かれたと云う図面を貰い受けた。高尾博士の話も大体高瀬教授の話と同じで開業医達は既に開業の希望を持って居るので、大学に移管することにしたと云う。

本部へ行って佐野教授に会ってみようと思ったが、後のことにして滑石へ向った。

自宅では朝鮮から無事に帰って来た弟の源之助が来て居て、朝鮮の話など色々出て時間をつぶしたが、夜に入って図面を書き影浦教授方の Plan に大改変を加えてこれならばと思う奴を書き上げた。

新興善校を大学に貰うように決定したのは十月六日で、その使者には影浦教授が行かれ、Horne から貰い受けられたものと思う。十月五日には僕は大村海軍病院にいた。明後日云々とあるのは十月八日のことである。

【十月八日】（月）

朝雨の中を長崎に向い、新興善に行く。高尾氏に会い市長等の来着を待って、自動車で出島の税関に行った。此処は長崎進駐軍の本部で此処に居る public health officer の Captain Horne に面会した。此処は大勢の係員が居てタイプライターを打ったり大声で話をしたり、外では自動車の警笛がなって実に喧しい部屋だったので思い通りのことを落ち着いて話すことは出来なかった。先ず新興善の Plan を見せた所、これで大体よいがと云いながら Waiting room を作れだの Record room を此処にしろだの、Operation room をこんな風にしてなど云って、色々の新しい部屋を作るので Bedroom は自分の作った Plan よりもずっと少なくなり、Bed 数も五百はおろか二四五しか出来ぬこととなった。これでよいかと云うので very good と云って置いたが、お蔭で外科の診療室がなくなってしまった。どうせ実際の場合には又改作せねばなるまい。Horne に何時から初めるのかと聞いたら早ければ早い程よろしいと云う。然し Bed もなければ furniture もない。bed は大村海軍病院には沢山あるからそれを持って呉れば、すぐにでも間に合うが、泰山院長を知って居るかと聞いたら、知らぬと云う。大村海軍病院が長崎医大で貰うことが出来たら、新興善病院の設備も早く出来るだろうと云って置いた。窓硝子は Horne が県庁の方に交渉して早く手に入る様取計って呉れるそうだ。

自分が提出した図面は大体左の如きものであった。所が一階では講

堂内のBathroomとDining roomとを逆にし、Laboratoryを略してRecord roomとなし、Surgeryの所にWaiting room及とし、Operation roomをAdmission officeにした。二階では右翼のLaboratoryの次のBedroomを矢張りLaboratoryに、其次をReception roomにせよと云う。三階では、右翼のB.R.を皆Operation roomに改造し、下の方から産室、洗濯室、外科手術室、其他の手術室、次に二室丈とってPost-operative Roomとした。これなどは却々よいと感心した。尚看護婦長室を作った事は亜米利加らしい。

新興善がすんで市の伝染病院に移り、市長と市の衛生課長とが色々説明して居たが結核を同時に置けと云われ、困っていた様だ。十二時過ぎに話がすみ、新興善に帰り、中食をすまして本部へ行く途中東大の卜部君がジープに乗ってやって来た。大学本部に行くが乗らぬかと云う、雨も降るので乗せて貰った。用は長大の顕微鏡を借りたいと云う。行ってみたがない。自分の内に二台と大村に十台程あるからそれを貸してもよいと話し又、新興善に引返し、卜部君がDr. Tarnowerと交渉した結果、僕の内にある二台を貸して呉れと云う。Major Bruneと共に自動車に乗せて貰って滑石の自宅に帰った。Bruneは鎮西学院に十七年、領事館に五年も居た丈あって日本語がとても上手だ。宅で柿、栗を馳走しながら子供達とも色々話して居た。

Bruneが帰ってから北村教授を訪い今日の一切を報告した。

四、大村海軍病院での講義開始

【十月九日】（火）

十一時の汽車で長崎に行き、本部へ行って白方事務官に初めて面会した。新興善のPlanを見せ、事務所を新興善へ移すことに関し、高尾医師会長と会談する為、事務官と柴田と三人で新興善へ行ったが高尾氏は不在で橋本氏と有富氏が居て大いに気焔を上げて居た。

僕はBruneをとらへて約十分間談じ込み、大村海軍病院を長崎医大へ貰う運動の困難なこと自分達残留組が皆心配して居ることを語り、協力を要望した。Bruneの力では勿論何とも出来ないことであろうが、一人でも多くの味方を得ることは此際望ましいことなのでBruneから其周辺の人達に披露してもらう様にお願いして置いた。

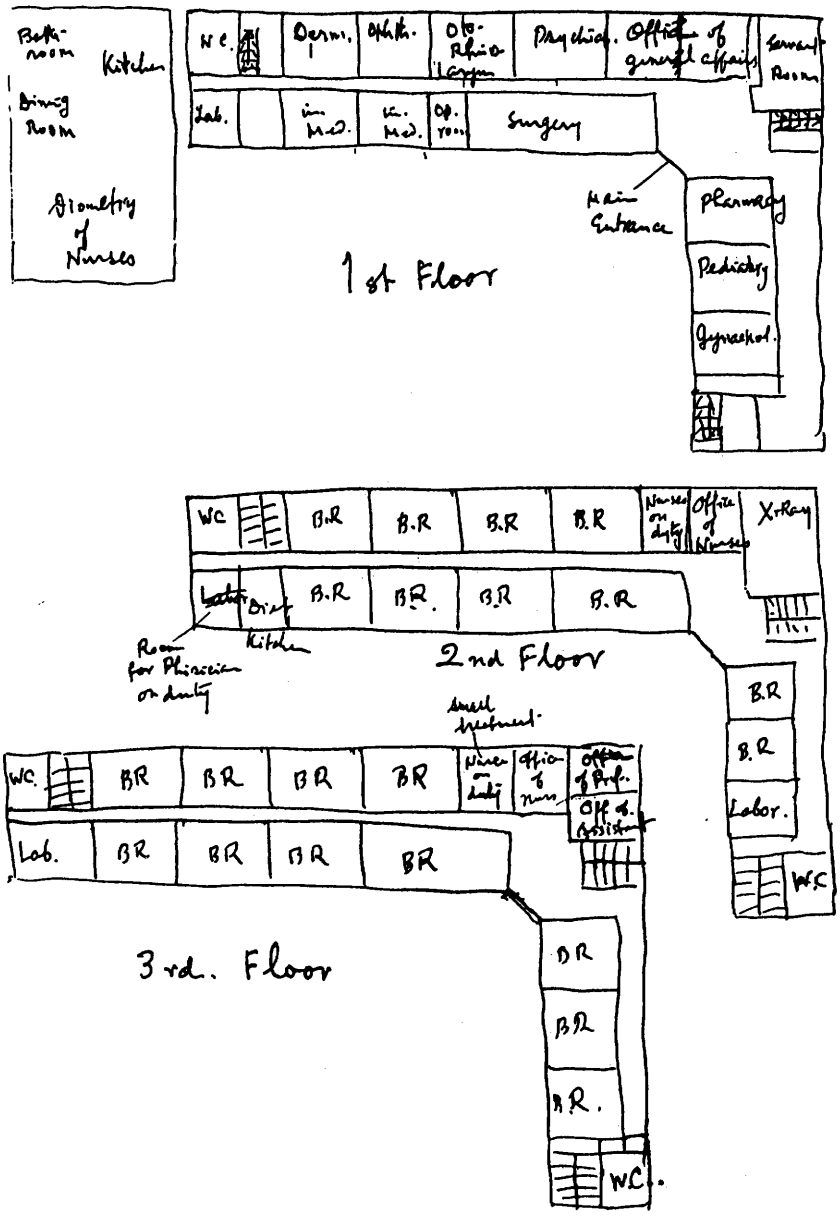
Bruneは永く日本に居た丈日本語は上手だし、海軍省・厚生省等の言葉も判り、人物も温厚で甚だ好都合であった。彼は「此喧嘩は大変六ヶ敷しいですね。心配して居ることは時々成功しないことがあります」など教訓めいたことを云って別れた。

それから大村へ行く積りだったが雨も降り、バスも行ってしまったし、靴も洋服も濡れてしまったので又滑石に引返した。

大村では今日から学生達への講義を始めたそうで、皮切りは小児科の佐野教授とのことであった。（この一文は昭和五十四年世界十月号より引用）

【十月十日】（水）

雨は降り風さえ加って暴風雨模様だったが、北村教授も多分今日行かれるので、汽車に乗っても今日は是非大村へ向うことに決心して、


Bath-room
Kitchen
Dining Room
Dormitory of Nurses
W.C.
Derm.
Ophth.
Oto-Rhino Laryngol.
Psychiat.
Office of general affairs
Servant Room
Lab.
Int. Med.
Int. Med.
Op. room
Surgery
Main Entrance
Pharmacy
Pediatry
Gynaecol.
1st Floor
WC
B.R
B.R
B.R
B.R
Nurses on duty
Office of Nurses
X-Ray
Lab.
Dietary Kitchen
B.R
B.R.
B.R
B.R
Room for Physician on duty
2nd Floor
B.R
B.R
Labor.
W.C
small department
WC.
BR
BR
BR
BR
Nurses on duty
Office of nurses
Office of Prof.
Off. of Assistant
Lab.
BR
BR
BR
BR
3rd. Floor
BR
BR
BR.
WC.

北村教授を訪うともう八時の汽車で出かけたとの事であった。依て急ぎ準備して十時の汽車に乗り込んだが、大村への連絡がなく、諫早で三時間待って大村に下車し、徒歩でずぶ濡れとなり、二三度田園の中に吹き倒されて三時頃漸う海軍病院についた。

佐野教授も同じ汽車だったそうだが、諫早から二里の路を歩いて自分よりは少し早く到着されて居た。北村教授は勿論午前中に到着された筈である。三人で僕の長崎出張の用件を報告旁々泰山院長を訪問すると、僕等の留守中、院長の方にも色々の事件があったそうだ。即ち大村の進駐軍司令部から立派な自動車で自分を迎えに来たので行ってみると軍政官らしいものが、大村海軍病院はどうする考かと聞いたので、「これは medical center として診療、研究、医学教育の機関として存続せしめ、長崎医科大学を此処で再建せしめたい希望を持っている。日本軍当局では之を軍戎保護院として使用し、傷夷軍人を収容し軍医が之を治療する様考えて居るが自分は之に反対だ」と答えたと云う。軍政官もこれに全面的に賛成したと云うことである。その軍政官が Cap. Horne の様でもあるが判然しない。併し自分が Horne に会った後に院長もどうやら Horne に面会したらしい様子であるが、院長は Horne を確実に知らないので其処の所がどうも判然しない。若し Horne であったとすれば誠に結構なことであると思う。尚先方では薬品材料のことを聞いていたそうであるが、千七百名の患者を一年間治療する丈保管している旨告げると Oh very good と双手をあげて賛成したそうである。何も材料を取り上げる積りではなく、足りなかったら寄附でもしようと云う腹だったらしい。これも院長の話である。

来る十六日には軍政官外三名程が病院及在庫品の点検に来るので皆

(75)

も立会って色々懇談したらよいだろうと云うことであった。其時迄に古屋野教授（教授が東京に行って居られることも先方が聞いていたので話して置いたと泰山院長は云う）が東京から帰られれば誠に好都合であるが、若し間に合わなかったら影浦教授を立会わせることにして院長と別れた。

病院から佐藤（調理所）君が来たので泰山院長に引合わした。院長はすぐ傭入れたいから履歴書を出して貰いたいと云う。

【十月十一日】（木）

暴しはないだ。未だ影浦教授も福岡に行かれたきり帰りがない。北村教授、佐野教授と三人外来をみ、病室を廻診して午前中を過した。午后は一時から二時半迄外科の講義。九病舎の二階大室で学生（医二、三、学部三、四）、假卒業生、医局員等を集めて約四、五十名。今日は先ず感想を述べ、次に原子弾症の事について一通り話した。

此講義は佐野教授が皮切りで、九日（火）の午后から初め、次の様な時間割りも作ったそうである。

様子が変って何だか変だが、段々馴れて来るだろう。明日は胃潰瘍

	8−9	13−14.5
月	婦人科	内科
火	外科	小児科
水	産婦科	精神科
木	内科	外科
金	内科	外科
土	泌尿科	

(76)

の患者が入院して来るそうだから臨床講義でもやろう。三回共自分ではやり切れない、早く木戸君か古屋野教授か帰って来て欲しい。

午后三時迄、白方事務官、柴田、井口高商事務官の三人が来院した。白方事務官の話では新興善に行ってみたが未だ小学校の先生が居て市から、話を聞いていないとの事であったと云う。早く何とか話を片づけて貰わねば困ると云う。尚、新興善を貰うのは土地、建物を文部省財産にして貰えるのか、一時借りるのか、それによって施設も手加減しなければならぬと云う。此等の方針は教授達が集って早く決定してやらねば事務官としても困るだろう。尚色々問題もあるので一度適当の時期に自分も東京にやって貰わねばならぬだろう、と話していた。其処へ泰山院長が入って来たので初めての挨拶をし、院長からも十六日に米国軍政官が来るので其時事務官も居た方がよかろうと云って居られた。事務官は十五日に来て其夜教授会をなし、一泊して十六日には是非方々を見せて貰う由答えていた。事務官達は五時に汽車に乗るべく病院を辞した。

院長は海軍の医官達には一斉に休暇を出すので、長大其他の先生方に主任になって貰って責任を持って貰いたいとの事であった。それは明朝病舎に貼り出させるから、もう医官達に遠慮せずにどしどし思う通りやって呉れと云われた。どうも海軍との喧嘩の味方に引込まれることは気持ちが悪いが、長崎医大再建の為には万難を排しても戦わねばならぬ。自分は三病舎及四病舎の主任になるらしい。其他は九大貝田助教授、東大吉川助教授、長大筬島助教授達だ。

(77)

【十月十二日】（金）

午前中病室、外来、餘り面白い患者も来ない。

午后講義 Ulcer of Stomach on the surgical stand point と云う題でお話した。患者供覧。

午后四時頃、影浦教授、高瀬教授来院。高瀬教授はすぐ帰られたが、影浦教授は本朝博多より帰崎、バスで大村に来られ、其侭宿泊された。三人で泰山院長を院長室に訪ねた。例によって院長の方から話し出され軍医連中は一両日中に登庁を停止するから皆大いに頑張ってやって呉れ、成るべく多数の職員が病院の方に来て置いて欲しいと云うので、明日のバスに託して連絡をとる事にした。夜三人でおそく迄駄辯る。

【十月十三日】（土）

九時四病舎廻診。

八時半影浦教授は手紙を白方事務官に書き、一、事務官は十四日に大村へ来ること、二、長崎医大では陸海軍学校の生徒を一人も受入れぬことにしたから、皆断って欲しいこと、三、電報を残存学生（影浦教授の知己）へ打つこと、等を申送られる筈だったが、既にバスは出発して居て駄目となったので、今日長崎へ帰る医専二年の内藤君へ託することとした。

中食後、外来に来て居る Magen geschwür の Kranke を見る。

手術希望なので入院させることを早田君に云い渡して大急ぎ、大村市内行きの定期バスに乗り込んだ。学生の病舎配置の件で影浦教授、北村教授等と集ることになって居たが、あとは二人に頼んだ。

大村では駅前、大村保健所の枝坂氏を訪い、陸軍病院に電話をかけて車を呼んだが何時迄も来ぬので結局歩いて行った。好天気。チョッキを着て居ては暑い位。陸軍病院に行ったら、空ベット数を聞いて来て呉れとの泰山院長の頼みで聞いてみたら三百床ある中、五十～六十

(78)

床丈ふさがって居る丈だとの事だった。軍医は尚十五人程確保してあり、何時傷夷軍人が南方から帰って来ても差支ない様にして居るとの事だった。病院はきたない。大村海軍病院とは雲泥の差だ。四時病院を辞し、ダットサンで西川病院の福田氏（兵器部長）を訪ねた。もうすっかり恢復して居るが、睡液瘻が出来て弱っていた。

五時半辞去。ダットサンで行く中、米国のジープがやって来、Schwartz が乗って居て「これに乗れ」と云う。乗り替えて病院へ帰った。

夜六時半から食堂で西洋人達と会食。集るもの De Coursey, Warren, Tarnower, Perry, Ebert, Sinclair, Berg 外一、二名。日本人側は東大の連中、長大、九大の貝田君、食后各人の研究報告があり、東大の連中も一場の報告を英語でしていた。米国人のはさっぱり判らず、日本人のでは吉川助教授、岸本君のは良かった。吉川君のは Anaemia の原因に対する考。貝田君のは年齢による抵抗力の差異、岸本君のは胃液検査、尿高田氏反応、骨髄像等に就て、三宅助教授も解剖の結果に就て話していた。長崎も何かやる様に云われたが準備して居ないので此次にと云って逃れた。閉会は午后十時過。出席、影浦、北村、佐野教授と余の四人。部屋に帰り又暫らく話し込む。

【十月十四日】（日）　快晴

今日は我が長崎医大にとり誠に慶賀すべき日であった。

朝病室へ出かける途中 De Coursey に会うと I'm glad to see you など云う。朝の挨拶には少し丁寧だと思いながら別れた。これから大村に行くのだとの事だった。廻診をすまし、部屋に帰って日記などつけて居ると、院長が十一時半頃影浦教授の部屋に行って、何か嬉しい

(79)

報告をして居るらしい。

北村教授、佐野教授等もついて行くので、あとから追いかけると院長は又僕に今日の吉報を繰返して述べた。それは次の通りである。

今日 De Coursey が大村から長崎の進駐軍本部へ直通電話をかけ、Horne に大村海軍病院の話をした所、先方からは長崎軍司令官の発表として「大村海軍病院は長崎医科大学に移管し西九州地区に於ける Medical center たらしむべし、以上は Mc Arthur 司令部に上申済み」とあったそうである。自分は思わず快哉を叫んだ。現地の運動が功を奏したのだ。萬歳だ。祝杯を挙げたい所だが酒がない。古屋野教授にも知らせてやりたいものだ。此上は鮮かな米進駐軍の所置に順応して少しでも早く実現させねばならぬ。新興善と大村と両々相俟って舞台は急に大きくなった。活躍だ、飛躍だ。男の腕の見せ所だ。

中食に行くと安木二部長が淋しそうな顔をして食って居た。何だか気の毒の様でもある。然し岩国海軍病院長として赴任するそうだから彼自身には余り関係はないが、西田一部長は盛んに暗躍して大村に残ることにしたのだそうだから今后どうなるか。大村に家をかい、子供達を大村中学に転校させ、色々と計画して居たことが水泡に帰したことを思えば、本人としては誠に遺憾であろうが、大局の然らしむる所如何とも致し方はない。思えば泰山院長の外交手腕は実に見事で、長崎医大は何と云ってお礼申上げてよいやら、感謝の辞を見出し得ない有様である。

午后東大の吉川助教授と卜部君とが来て、新興善の善後策につき相談した。当方としては早く患者を当院へ移し、唯原子爆弾患者の外来診療のみを残し、他の室は片づけて修理改造し、出来る丈早く再度外来診察の出来る様計りたいと思う由を伝えた。東大の方でも凡そ一片

ついたからあとは長大の方に米軍医への協力方をお願し度い意向の様であった。

午後四時頃事務官が来た。新興善の件、大村海軍病院の件、古屋野教授へ打電の件、合同慰霊祭の件、卒業式の件等打合せを行って居た所、突然東京から林先生（名誉教授、科学研究会長）木下博士（工業大学名誉教授、学研会員）其他事務官二人が来られ大騒ぎとなった。両先生方は原子爆弾空襲の当時の様子を色々聞かれた。泰山院長は早速夕食の事、宿所の事等を斡旋し、両先生は外国人と一緒に、他は別室で食事をとる事になり退出。其后は御茶菓子の乾パンを食べながら例によって駄辯った。

尚書き遅れたが、夕方事務官が来た後、泰山院長が我々の室に来られ、佐世保の長官来訪時の話をされた。それは本日午后四時、佐世保から長官及軍医長が来訪されたが、其時 Dr. Warren 及 Sinclaire が立合い、院長が「本日長崎進駐軍司令部から、大村海軍病院は長崎医科大学に移管し、長崎地方の medical center たらしむべし」との司令があり、medical center とは診療、医学教育、研究の三者を兼備したものを意味するから、軍戎保護院としては使用出来なくなった」と述べ、Warren, Sinclaire は之を裏書きしたそうだ。長官達は本院現役将校達を集め「進駐軍司令部でそう云うなら仕方がない。お前達は川棚へでも行って貰う様になるかも知れない」と云い渡したそうである。尚長官は、大村を軍戎保護院にすることは、佐世保進駐の第五艦隊の軍医長 Young が承認した由を云って居たそうであるが、院長は第五艦隊よりも長崎の進駐軍本部が既にそう決定して居るのであるから仕方がないとはっきり申伝えたと云う。

其後、Warren は明日佐世保に電話をかけて Young につまらぬこ

(80)

とを云わない様伝えるそうである。もうこうなれば十中九分九厘迄大丈夫のものと思う。明後十六日には軍政官一行が病院に来るそうであるから、其時本決りになるであろう。

【十月十五日】（月）

林先生達は知らぬ間に長崎へ行かれた。

午前中に廻診、廻診中に看護婦達に総員集会の命令が来て居た。電話で院長室によばれたので行ってみると、農業会の人が来て居て、牛の処置、及牛乳の契約があって居た。牛は十八頭居るが、昨夜の中に六ヶ月分の飼料が全部なくなったとの事である。それは何処かへ運んで燃してしまったそうで、誠に言語道断のことである。西田部長の仕業だと院長は云って居た。牛は皆農家に拂下げ、種牛は農会長の希望により無償拂下げをなし、其代り乳牛から出る丈の牛乳を十月一杯無償でおさめることを約束して居られた。十八頭も居て一日2斗との話であったが、これも横流れして居たものであろう。鶏は二百三十羽居たものが、今日では僅かに五十数羽になったとかで、これも院長大いにあきれて居られた。戦に負けたとは云いながら、日本人は何とだらしない国民か、まるで野蛮人と同じで、これだから日本が負けたのも無理がない話だ。

院長の取次で米軍 doctor に List of physician を提出した。

患者の治療は長崎が引受けることになった。

受持は（次頁の様に決めた）。

院長は士官室の当直もやって呉れと云う。次（頁）の通り決めた。

尚院長の希望ではないが、各病舎にも一人宛当直を置く様皆に申渡して置いた。中食の時自分から上の事を云い渡した。

(81)

(82)

	教授	主任	分教授	
一病室	北井	一ノ瀬	本多、二木、青、金子	
二病室	景浦	森沢	大南、菅、林、中村	
三病室	調	森	鈴木、岩永、松本	
四病室	調	木戸	須山、藤井、中村	
八病室	北村	筑島	大食	大坪、早田、野田
十四病室	景浦	筑島	高橋、中村	
十一病室(伝染)	伏野	浜田	高橋、中村	

15/土	月	一ノ瀬	21/土	日	森	27/土	土	高橋
16	火	森沢	22	月	木戸	28	日	浜田
17	水	本多	23	火	金子	29	月	筑島
18	木	高橋	24	水	一ノ瀬	30	火	森
19	金	筑島	25	木	森沢	31	水	木戸
20	土	浜田	26	金	本多			

午后一時半、長大の診療員全部、東大、九大の連中を庁舎会議室に集め Perry, Le Roy も来て Le Roy から今後の方針につき話しがあった。院長も居て長大諸君に色々の注意を与へた。明日から午后一時半に会議室に集り、研究及診療に対し、評議をしたいと云って居た。そして Penicillin の効果に就て一言して居た。本院に入院中の原子弾症患者は男九十名、女七十四名で合計百六十四名あり、本日二人死亡した。Warren が Sektion をやるのを見に行ったが、手際は却々鮮かであった。四病舎の老婆は Atrophie 以外に何も特別の Befund がなかった様だ。A. pulm. に Petechien のあったのは一寸変って居る。Inanitious tod? 死因を聞いたが判らぬと云って居た。今一人は十七歳女、Miliar tbc で見事なものであった。

夕方横山君及筬島君来院。筬島君の話では、進駐軍から旧大学及病院内に死体があるから片附けること、学内焼跡居住者を追払って番人を置くこと等、注意があったそうだ。中山衛生課長がわざわざ本部迄来たとの事。

北村、横山教授とも打合せて、学生を連れて行き至急清掃に従事することに決定。自分は明十六日夕方長崎に行き二〜三日滞在して、大学及新興善方面の交渉に当る積りである。

【十月十六日】（火）

今日は軍政官が当院を訪問すると云うので、朝から院長は右往左往して居る。学生に道路の清掃をやって貰いたいと云うので、外科を休講し、横山教授に頼んで監督して貰った。各病舎の入口に診療主任の名を貼り出すことは自分が字を書いて庶務に頼んだ。学生の中には皆が掃除に行ったのにも拘らず、碁を打っているものが居た。

長崎から来た米軍使は Cap. Horne で院内を検分し、泰山院長の説に大いに賛成して「大村海軍病院を長崎医大に移管し長崎地区の medical center たらしむる」旨の文書をタイプライターで書き之に sign して直ちに佐世保に行き Young に交渉すると云って居たそうである。僕等は Horne には面会しなかった。

午后、影浦、北村両教授と三人、泰山院長を訪問し、北村教授と二人は新興善病院整備の為、長崎へ向う由を告げ、其時院長より、本日 Horne との交渉の一通りを伺った。院長は Horne が佐世保に行って交渉すればもう大丈夫で、本院は長崎医大のものになったのも同様だと云って居た。所へ大村市長も来たので自動車に乗せて貰って大村駅に行き汽車（四時）に乗った。市長は駅長に岩松駅を少し北へ移して大村海軍病院へ行くのに便利な様にして貰う交渉をするのだと云って居た。二人は六時滑石に直行し、それぞれ自宅に引取った。今日は何となく愉快だ。

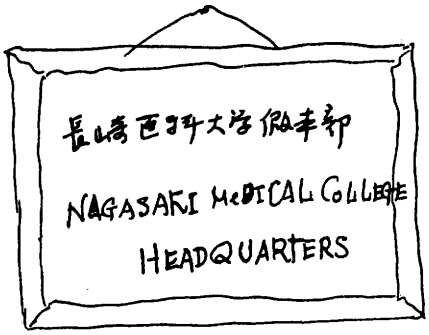
【十月十七日】（水）　神嘗祭

朝八時の汽車で浦上下車、久し振りに大学の焼跡に行った。恐らく弘治の骨拾い以来のことだろう。五十日振り以上になる。話の通り品物が色々少くなって居る丈で大した変化もない。眼科では小笠原君が学生看護婦と一緒に本の整理をやって居た。調外科の東病棟でびしょ濡れになった Kriegschirurgie を戦災記念に持って帰ることにした。それと器械の部分品を何かの役に立つかも知れぬので持って行った。十一時頃から徒歩で新興善に向った。つくと古屋野教授が帰られて居ることを耳にした。又交渉が思わしくなく止むを得ない場合には、少し建物を借りることを約束して来たとのことであった。自分達は現地

で全部を貰う約束迄したのに、態々東京迄飛行機で行ってMc Arthur司令部へは行かずにそれ丈の成果とは情ない。却って行かれない方がよかったと口惜しく思った。

高尾氏室で古屋野教授に会ったので、昨日大村海軍病院での話をすると、教授は今朝Horneと会って来て悲観的のニュースを聞いて来たばかりとの事であった。それによるとHorneは昨日佐世保に行ったがYoungとの交渉がうまく行かず、昨夜大村にも立よって「自分の権限ではどうにもならぬ」由を告げたそうである。恐らくYoungが既に佐鎮長官に「軍戎保護院にしてもよろしい」位の言葉を与えて居る結果に違いない。長崎のHuntと佐世保のYoungとが如何なる関係にあるのかが一寸不明だが、こんなことになるのなら我々もここ迄引ずられずに何とか方策があったのかも知れぬのに、と一寸厭な気がした。

大村から佐野教授が帰って弘心寮に居ると云うので、古屋野教授と



一緒に行った。昨夜Horneの大村に於ける話も結局、今朝古屋野教授が司令部で聞いた話も同じで、事は多少面倒になっているとの感が深い。泰山院長はどう考えて居られるか。長崎医大も重ね重ね苦難をなめさせられるものだ。

新興善の本部で鍬先氏に会い歩きながら町に出たが、米兵が沢山散歩して居て喜楽館も開き米兵も入場して居た。三時頃の汽車で帰る。

五、医大本部を新興善に移転

【十月十八日】（月）

九時新興善につき、高商の本部に出かけようとすると、本部から荷物を運んで来たと云うトラックがついた。向って左の一階の室に決めて机、椅子を搬入し、事務所が出来た。二階の村上君達の居る部屋に行って、額ぶちのこわれを利用して看板を作った。これを門にかかげ、今迄の看板は入口の右壁にかけた。

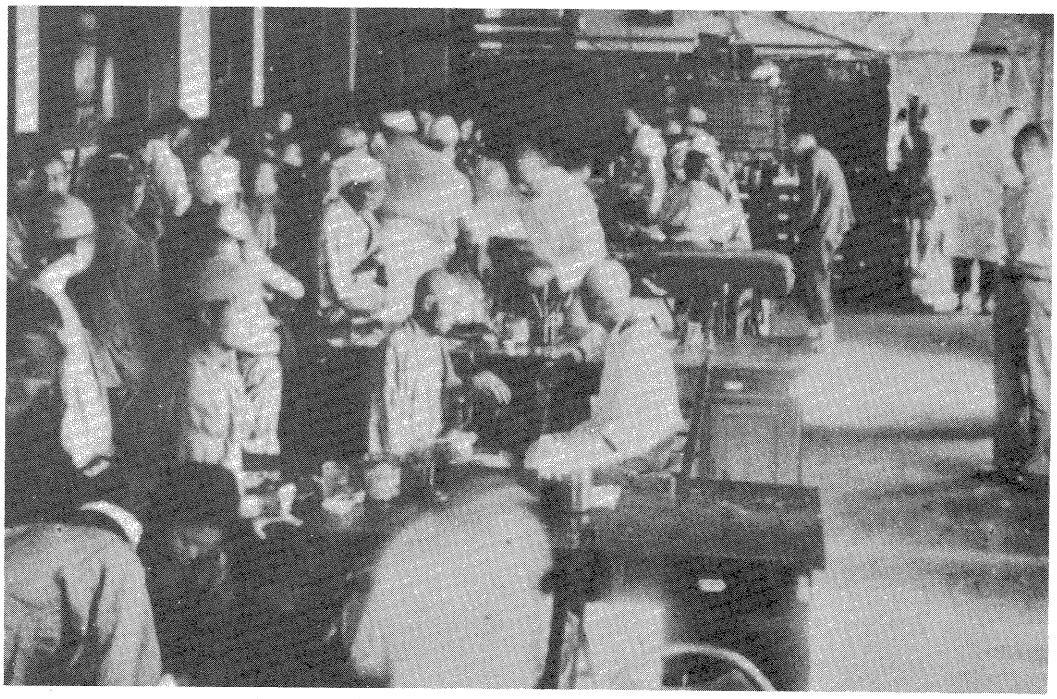
一通り机も並んで庶務らしくなった頃、高尾氏が来られて、次の様な話があった。

今日Horneから呼ばれたので行った所「今日午后大村海軍病院を長崎医大に移管する件につき、佐世保の司令部と話合ったが、自分等の権限外でどうすることも出来なかった。就ては今日午后一時半から知事室に於いて、佐世保と長崎の米軍司令部のものが行って連絡会議をやる積りだから、お前（高尾氏）と古屋野教授が居たら一緒に出席する様に」との事であったそうである。古屋野教授は大村に行って留守だから自分がobserverとして出席することにした。

一時半に県庁に行ってみるとやがてHorneだけが来て知事の所に

行こうと云う。通訳として西村嬢をさがしたが留守だったので、初めは外人通訳、後には日本人通訳がついて話が始まった。

Horne の云う所は、「長崎では医科大学病院がなくなって、沢山の病人を診療することは出来なくなったが、大村海軍病院が長崎医大へ移管になれば、これを長崎県の病院として沢山の患者を収容することが出来るが、皆はどう考えるか。長崎市では新興善病院、大浦陸軍病院、傳染病院（銭座校）が出来てこれで市民の病人をみるが、これで足りない時は大村に送って入院させる。又長崎県の病人は大村で治療される。これは大変よい事と思って、自分は色々奔走したが、自分の力ではこれを決定する事が出来ない。これを決める為には長崎の連絡委員長（知事）と佐世保の委員長が協議をして、其れによって決定した事をアメリカの司令部に云って呉れれば Mc Arthur 司令部に上申するから其通りに決定するだろう。尚自分は古屋野教授が、大村病院は既に文部省に移管になったと云った事を噂に聞いたが、若しそれが真であれば、協議は不用かも知れぬが、それが間違って居た場合には出来る丈早く協議して、自分の所に知らして貰いたい。」と述べて帰って行った。其後で知事は自分、高尾氏、岡田市長を呼び止めて「今 Horne の云った事を其侭云うと、佐世保の連絡委員長は鎮守府長官だから却々ウンと云うまい。アメリカの方でこんな弱腰を見せると是が非でも軍戍保護院にすると云って協議は決裂するかも知れぬ。それよりも多少修飾して「アメリカの方では大村海軍病院を長崎医大に移管してこれを medical center にすることを極力熱望してるが、それを長崎と佐世保の連絡委員長が連名で上申すれば事は誠に簡単ですぐにでも運ぶ様に云ってるがどうか」とでも云わなければ駄目だろう。或はこれは寧ろ長崎地区丈の希望として直接委員長名で陳情書を



新興善小学校に於ける被災者の治療状況（追憶より）

提出した方がよいかも知れぬ。何れ二、三日中には、佐世保に行く用もあるから、何とか善處しようと申された。自分達は宜敷く頼む由を述べて引下った。

Horne の話の中に、長崎では子供達が学校がなくて困って居るから、大浦陸軍病院を大学で使う様にしたらどうかとの話も出たが、知事及市長は、それはとても小さくて長崎中の患者を収容する事は出来ぬ。小学校は外にも出来るから新興善を使用しても少しも困らぬ」と大変大学に同情した言葉を述べて居た。Horne は尚、新興善は元々学校だから病院にするのは大変だろうと云ったが、自分は文部省から金が出るから出来る由を答えた。

以上で市長と高尾氏と三人で市役所迄来たが、岡田市長は大学が長崎から全々離れると困る、新興善があれば関係もついて居るから将来長崎へ帰って来るにも都合がよいだろうと云って居た。

書き落したが、県庁の連絡会議の席上、自分は一般の委員達に向って大学の立場を述べて置いた。「長崎医大は創立の初めから長崎市とは切っても切られぬ縁があるので、古屋野教授は極力、当地に大学を再建する様、考慮されたが、適当な建物がないので大いに困惑されて居たが、丁度其折に長崎医大出身の大村海軍病院長泰山少将が尽力されて、大村病院を米軍に接収されるのを防がれ、米国側に対してもこれを長崎医大に移管して medical center 即ち教育、研究及診療の機関たらしむる承認を得られたのであります。但しこれは結局暫定的なもので、将来長崎が復興する際は、大学も必ず長崎に帰って来る考でありますので、この点は了承の上、現在困って居る教育の為、大村病院を大学に移管される様皆様の御援助をお願いする次第であります」と述べた次第である。此点では誰も異存はない様子であった。

四時近く新興善に帰り、五時の汽車で帰宅する積りであったが、大雨の為七時の汽車となり、家についたのは八時であった。食后今日 Horne に頼まれた、長崎医大被害状況の図面は停電の為、書くことが出来ず明朝にして其侭床についた。

【十月十九日】（金）

朝、大学一覧を手本にして図面を書き赤（焼失）青（倒壊）の色採をして、十時五十六分の汽車で長崎へ行き、Horne に手渡した。何に使うかと聞いたら、原子爆弾の研究の為だと云って居た。二日程貸して呉れとの事であったが、気前よく呉れてやった。嬉しかったと見えて very good, thank you などお世辞を云って居た。本部で又高尾氏に会った。今日又進駐軍本部へ呼ばれ、今度は Galloway 大佐から陸軍病院の経営をお前やれと云われ、困って居るとの事だった。耳ビ科の橋本氏も一諸だが、其他医者を集めよと云われ、自分としてもそんな事に何時迄もこだわって居ては何にも出来ぬので弱るが、アメリカの事であれば仕方がない。其時は大学から人をよこして貰いたいと申入れられたが、自分は「大学も方々に分れて病院を持つので其処迄手が出せるかどうか」とあいまいな返事をして置いた。

新興善の大学への移管は来る二十三日に引継ぎをしたいとの事だった。大体承諾して置いた。詳細は其時決定する積りである。

薬品は米国から貰ったものは大半なくなり（医師連中が持って帰ったものが多い！）残部は市のもので、これも各自立替えてあるのでその方に当てなくてはならぬだろうとの事であった。尚、毎週米側から薬を呉れるがそれは唯受取丈やればよいそうだ。

事務官は看護婦の事を心配して居たから待機のものへ手紙を出して

至急出崎する様云い伝えた。宿舎は寮を一つあけてそれに入れる様にと云ったが、それでは足らぬのでお寺を交渉してみようと云って居たから承認して置いた。

大村への言伝(ことつて)としては㈠、合同慰霊祭を大体十一月一日位に浩台寺でやりたいこと、㈡、米、原子弾研究員が雲仙に行きたいとの申出につきバスは県当局に交渉した結果出来たが、木炭車の為小浜迄しか行かずホテル迄は登れないこと、等であった。

午后四時過大村着、古屋野、北村、佐野教授が居たが、佐野教授は上京の為四時の汽車で長崎へ向った。用事は学長推薦の件（古屋野教授）及厚生省へ交渉の件だそうだ。厚生省へ行くのは早晩軍戎保護院になれば厚生省のものとなるので、予め大学移管の件を交渉して置く為である。幸い影浦教授同期の石川氏（前出(54)頁）も同省に居られ、佐野教授も外遊中知って居るとの事であった。自分は南門の柵迄送って行き、道々昨日の県庁連絡会議の事を話し、厚生省へ行ったら「長崎医大は大村病院を措いては今の所再興の道はない。軍戎保護院は大村でなくても川棚病院で差支なく、若し川棚が共済会財団法人のもので金が要るとの事なれば、五十四万円程出せば手に入るので、文部省から基金を出して貰って海軍へ譲り、其代りに大村病院を貰う様交渉した方がよかろうと述べて別れた。

帰って古屋野教授、北村教授と三人で又色々に協議した。聞けば昨日後任院長が来た時、自分はHorneから来週火曜迄院長の職責をとる様にと云われてる旨を述べて事務引継を延ばしたそうで、其為新院長は佐世保に引返し、泰山院長が事務引継を拒絶したので帰って来た由をつげた為、本日佐世保に出頭せよとの命令が来、若し行かねば軍法会議に廻る惧れもあるので古屋野教授は出頭をすすめて今行っている為留守だとの事だった。

(89)

留守の間に事態は急速に悪化して居る様に思われる。昨日古屋野教授は佐世保に鎮守府長官及Youngに会いに行かれたそうだが、Youngには会わずに海軍側にのみ会って来たそうだ。即ち初めに佐世保滞在中の内政部長に会って話した所「海軍の事は海軍の方でやってるので」と俵中佐に紹介して呉れ、俵中佐に会うと、何の訳だか知らぬが「長官に会ってもDixonの事は話して呉れるな」と古屋野教授に嘆願したと云う。此点に海軍としても大きな弱点を持って居る様だ。長官には唯挨拶程度の会見に終ったが、印象から云うと「医学教育は必要がない」と泰山院長に云った事が充分うなづかれるtypeの人だったと云う。長官も俵中佐も古屋野教授がYoungに会うことを止めたと云うが、其処にも彼等の弱点はある様に思う。矢張大学としては是非Youngに一応会見してよく事情を説明し、Youngの考を飜へさせるより外に手はない様にも思われる。泰山院長は是非一応Youngに海軍病院を見せて、とくと説明してやりたいと云って居られたが、それが一番近道だろう。

【十月二十日】（土）

朝、影浦教授来院。佐野教授と行違いとなる。昨夜は佐野教授には会われなかった由、午后又「佐野教授に面会して東京に行ったら石川氏（厚生省）に是非会う様頼むから」とて大村をたち長崎へ向われた。

朝九時の汽車で古屋野教授も長崎へ行かれた。出発前泰山院長から余に電話がかかって来て、長崎へ行かれたら永野知事に是非一度大村へ立寄られる様伝えて貰いたいとの頼みがあった。直ちに古屋野教授に伝えた。電話で泰山院長は大いに昂奮して居り、今度の新院長は杉

(90)

山鎮守府長官と同郷で其為故郷にも遠い此地に病院船の航海回数が未だ一回残って居たにも拘らず転任させられたもので、結果泰山院長撃退策から出たものらしいとの事。又新院長は若い時藝者と心中した人で藝者は死に自分は助けられた経歴の男で、本来なら休職にでもなるべき所杉山中将等から助けられた男だそうだ。教授の食事を並食にしたとはけしからぬと大いに憤慨して居られた。古屋野教授を玄関バス迄送って行くと病院の総員が玄関前の広場に輪を作り、其等に対して泰山院長は挙手の礼をなしつつ一巡し、官舎に向って帰って行った。

其直后、誰かが一同を又何処かに集る様号令を下して居た。聞く所によると裏の広場に集めて新院長は「本院は軍戎保護院の病院となる。皆はその積りで大いに頑張って貰いたい」と云ったとか。泰山院長からの電話で判った。泰山院長は自宅には引取ったもののいらいらして居るらしく色々電話がかかって来る。遊びに来て呉れとも云う。何だか皆が見て居る様で官舎には足が向かぬ。行きたいのは山々ながら。

【十月二十一日】（日）

来る二十三日に医師会から新興善を引継ぐことになって居るので、今日のバスで長崎に向った。新興善には古屋野教授が出勤して居られた。聞くと昨日は永野知事が既に北松に出張して居たそうで、多分佐世保に行って佐世保地区連絡委員長たる佐鎮長官に面会されたことと思う。大村に立寄って泰山院長に面会されなかったのは如何にも残念だが、今は協議の結果を待つより外に仕方がない。帰りのバスに託して北村教授に手紙を書いた。尚、古屋野教授は福岡、佐賀地方に旅行の予定だったが、今が最も大事な時の様に思われるから、暫く出張を延ばして貰う様話した。古屋野教授も案外呑気だ。大学が立つか立たぬか未だ判らぬ現在、挨拶廻りでもあるまい。大学が確定してからなら行っても気持ちがよいだろうに。

十二時の汽車で滑石の自宅に帰り、家族連れ立って滑石大神宮に参詣した。今日は滑石の秋祭りとのこと。

【十月二十二日】（月）

明日の引継の準備の為出勤。昨日北村教授へ託した手紙に調理所の佐藤君、薬局のもの等を長崎へ返して貰う様書いて置いたので、バスで佐藤君、谷君等が来て準備が出来た。庶務からは用度の柴田、事務官等が立合うことにした。

午前中に医師会長高尾氏も本部を来訪して明日の準備交渉をした。薬は各開業医達が立替へて居るので、市からの配給品から貰わねばならぬと云う。又アメリカが呉れた薬は高尾氏に個人としてやるのだと云ったと暗に大学に渡すことを拒避して居る。もう大部分各自が持ち帰った後だから沢山も残って居ない。

十一時頃ついた大村のバスから北村教授の手紙が来た。今日都築教授が大村から来て知事に面会しビーチホテルに一泊して引返す由、同じ頃県庁から永野知事から古屋野教授に午后三時面会したき由の手紙が来た。知事は最早北松から帰ったと見える。十二時前、県庁に中山衛生課長を訪い、赤十字看護婦を十一月八日迄引続き置いて貰うことをお願いした。続いて赤十字社に山下氏を訪い、同様のことをお願いし、承諾を得た。午後都築教授来訪、古屋野教授と二人で次の如き話を聞いた。

日本には復員海軍々人の病人が約三万と見られ、其中一万五千は入院させねばならぬが、接収を逃れた海軍病院ではベットが一万二千しかない。故に大村を長崎医大にやる訳には行かぬが、其一部を使ふこ

とは当地の事情から許されるだろう。然し海軍病院である以上、基礎教室を作ることは絶対許されない。だから若し長崎医大が大村に行くとすれば学生を集めて講義をやることは出来るが、基礎は今暫らく待って貰わねばならぬ。其中海軍病院は厚生省に移管されるが、そうなっても復員軍人の治療が主であるから、それが済む迄は全幅的に大学が使用することは出来ない。それで大学は今暫らく辛抱して貰って復員軍人が段々減って治療が完了する迄我慢して貰わねばならぬだろう。若しそれが出来ないとすれば此話は打切るより外はない。」

自分は此話の途中一～二回半畳を入れたが要するに都築教授は海軍軍人で我々の味方ではない。少なからず腹が立った。これでは長崎医大の再建も大変で、果して可能かどうか判らない。矢張り急速に大学のものにするにはアメリカの手を煩わすより外ないだろう。

午后三時、古屋野教授は知事から呼ばれて県庁へ出かけられた。佐鎮長官との協議の結果を聞きに行かれるのだろうがどうせ嬉しい結果は予想されない。

六、新興善病院の医大への移管

【十月二十三日】（火）

今日は新興善病院移管の日。午前中に庶務、薬局、調理所等を集めて、午后一時頃から二階の救護所本部に出かけ、調理所は事務官と佐藤君、備品は柴田君、薬剤方面は谷君と薬局の某君、夫々手分けして引継ぎを行った。萬事ぬかり勝で、機械器具等も全く支離滅裂の有様だった。調理所では全々品物がなく、明日の米から今日中に貰って置かねば炊出しが出来ぬ有様。薬は相変らず手渡すのをいやがる有様。

(93)

円滑に行かぬのも無理はない。

午后四時頃、いい加減に打切った。引継ぎがすんでも尚救護本部には医師会連中が出かけて来る腹らしい。

夕方、卜部君（東大）が話たいことがあると云う。行ってみると、都築教授から昨日古屋野教授に話があったと云う。原子爆弾症の調査の件だ。十一月十日迄に五千人を調査するとの事だ。団長に僕がおされ、卜部君はStaffとして僕を助ける。学生五十人を使えば一人一日十人で五千人になる計算だが、どうも困難な仕事だ。調査用紙は東大佐々教授が亜米利加のを参照して作ったのがある。一人から聞くのに優に十分はかかる。それが向うから集まって話して呉れれば訳はないが、今迄に何辺となく同様の調査をして居るのでそれも駄目の様だ。戸別訪問か、市外地調査か、一寸見当はつかぬ。明日迄考えさして貰うことにして別れた。大体来週月曜から初めるそうだから、それ迄に何とか準備しよう。用紙は活版で印刷させればそれにこした事はないが、それも出来るかどうか不明だ。今日の長日に次の様な記事が載った。多分泰山院長から出たものと思われるが痛快な記事だ。泰山院長に柿と松茸を贈ることにしてバスで大村に帰る古閑君にことづけた。

院長としての新興善病院の改造、診療、原子爆弾災害調査団長としての仕事、一人二役で忙しい事、目の廻る様だ。が、男の腕のふるい所、大いにやろう。暫らく大村問題は古屋野教授や北村、佐野教授等にまかせる事にしよう。

【十月二十四日】（水）

午前中、新興善外来の繃帯交換をした。今日から大学でやることにして居て、人を集める暇がなかったので仕方ない。朝汽車で森君に

(94)

(95)

会ったので助かったが、ガーゼ、脱脂綿、其他不足勝で困った。田添、松尾氏等が手伝って呉れた。九時に新興善についたが、原子爆弾患者が最早四十～五十人押しかけて居る。しかしもう大半治って居るので十二時頃迄に片づいた。

午後泰山院長、新興善へ来訪。今度出来た市民病院（陸軍病院跡）をみに来たのだそうだ。Horne が見に来る様云ったのだろう。古屋野教授と一緒に出かけられた。諫早の藤田及北島氏来訪。

午后木戸君がひょっこり来た。今日ついたとの事。山陽線の被害で出て来ることが出来なかったと云う。井上満治、久貝君も来て居たが忙しいので、ゆっくり話も出来ない。古屋野教授は泰山院長と共にバスで大村へ。

北村教授と原子爆弾災害調査の打合せをした。同君にもこれと言った名案はないらしい。結果戸別訪問、近郊の調査等で学生は大村から毎日汽車で出すことにした。（この段25日大村での出来事）

木戸君は此夜宅に一泊した。

長崎醫大の再建

大村で運動開始か

長崎医大の再建に就ては医学的研究の大乗的見地より同病院の接収後の利用を大村海軍病院を利用することによって新く建設の見透しは つき、医大側は文部当局に対して同病院に移転を要望中であるも大問題となり、既に軍部側においても国民の保健福生と医学研究の為に医大の再建に協力すべきであるとの意見に一致した、同会の意見としては此の機会に医学部医大を大村にといふ強硬に願い出へではなく、一部の煽動者のため保護軍人後援所に移転されることによって医大の再建不可能ともなれば、既民の不満計り知るべからざるものがあるので、寧ろ大村移転が暫定的としても飽く迄医大再建に協力すべきである

大村を米軍も希望

縣民の保健施設にも最適

醫大再建

大村海軍病院を利用しての長崎医大再建問題につき県知事長崎警備隊司令官ホース大佐は二十三日大村海軍病院に乗り後行以後の各町村及び大村市内関係医師の会議合の席上大村海軍病院を利用することによって長崎医大の再建を計るべく長崎県知事より佐世保鎮守府長官海軍省方の申請書を提出したところ同長官より許可相成りの通知に接したので、暫定的に長崎医大の再建を計り以て県民の保健福生と医学研究の為に尽したいとの意向を示し近く同司令官より何分の指令に接すべく既に長崎医大再建も既定的とみられる

【十月二十五日】（木）

朝八時の汽車で木戸君と大村へ向った。十時頃病院に到着。午后手術。Reiskörperhygrom で入念に手術したので Sack が全部剔出されて面白かった。Knochen の手術二つは木戸君にやって貰った。

小浜の宮城君と同盟通信の男が病院に来て居た。泰山院長から電話がかかって両君に面会したいと言う。夕食の時宮城君に伝えたが、院長官舎へは行かなかったらしい。北村教授及古屋野教授は夕方四時の汽車で長崎へ帰らる。

夕食后に学生（学部三、四年、医専三年）を集めて、原子爆弾災害調査のことを話し、長崎医大の名誉にかけてどうしてもやらねばならぬことを告げ一同の憤起を促した。学生は三十人宛七時の汽車で長崎へ出張させ、九時新興善着、帰りは五時の汽車にする。三十人を五人宛六班に分ち町を戸別訪問する。一人宛十人はどうしてもとらねばならぬ事等を説明した。

説明がすんだ時、須山君が大村町へ散歩に行かぬかと言う。君の親戚になる医師（松尾氏）を訪問するのだと言う。先日針を折れ込ました医師だそうだ。大急ぎで出かけ、大変馳走になり、九時にウイスキーを貰って辞した。

(96)

【十月二十六日】

午前、総廻診。泰山院長から又電話がかかって宮城君と同盟通信社員に是非会いたいと云う。岩永君（古屋野外科）に手紙を託して呼びにやる。午前中に院長官舎を訪問したものと思う。

午后、臨床講義、Cause of the intestinal stenosis について話し、患者供覧並に gastric ulcer 及 Reiskörperhygrom の標本示説。

今日の新聞に右の様な記事が載った。これも痛快だ。Horne が医大に好意をよせて活躍して居る様子が伺われる。これでどうして早く長崎医大のものにして呉れぬのか。歯がゆくてならぬ。

夕方のバス便で古屋野教授から、十一月二日の慰霊祭に出す乾パンを新院長に交渉して呉れと云う。院長室に出かけて言って交渉したが、ウドンとかえることを話すと、すぐに承諾して呉れた。其序に次の様な話を打ち出した。

(97)

(98)

基　　礎

解　　剖	佐藤助教授		
生　　理			
生　　化			
病　　理	竹内教授	若原助教授	
薬　　理			横山講師
細　　菌		高橋助教授	青木助教授
衛　　生			原
法　　医		徳川助教授	
薬　　専		横山教授	

(195)

臨　　床

内　　科	筬島助教授　楠井医専教授　高橋講師 (横田教授)　大倉、中村、黄、土山、 影浦教授（千住講師）吉川、古閑、小柳、林、高田
外　　科	古屋野教授　宮城講師　田辺、多田、岩永、 調教授　木戸助教授　森、佐藤、呉、日高
婦　人　科	本多講師　高村助教授　五島、二木、
小　児　科	佐野教授　浜田医専教授　森助教授　田川講師 平野
皮　膚　科	北村教授　一ノ瀬助教授　金子講師 黄、黒木、東岡、
耳　鼻　科	長谷川教授　江上助教授　柴田講師、前田
眼　　科	
精　神　科	高瀬教授　松下助教授　中江講師
レントゲン科	永井助教授　施
薬　　局	谷、眞野、川本、菊野、池田
庶　　務	中島、山南、鬼塚、友成、柴田、長井、 佐藤（調理所）、青木

(196)

バス、トラック長崎往復

24／IX	バ　ス1	
26	バ　ス2	トラック1
27	乗用車1	
28	バ　ス1	
29	バ　ス1	
30	バ　ス1	
1／X	バ　ス1	
2	バ　ス1	
3	バ　ス1	
4	バ　ス1	
5	バ　ス1	
6	バ　ス1	

(198)

食　事　表

月日	朝	午	夕
26／IX	－	－	影浦、北村、調(3)
27	影、北、調(3)	北、調(2)	古屋野、北、調(3)
28	古、北、調(3)	古、北、調(3)	古、北、調、横山、一ノ瀬(5)
29	古、北、調、横、一(5)	北、調(2)	北、調、浜田、筬島(4)
30	北、調、浜、筬(4)	北、筬(2)	古、北、佐野、筬(4)
1／X	古、北、佐、筬(4)	古、北、筬(3)	古、北、筬、一ノ瀬、高橋(5)
2	古、北、筬、高、一(5)	影、筬、高(3)	影、北、佐野、調、筬島(5)
3	影、北、佐、調、筬(5)	影、調(2)	影、調、横山、原(4)
4	影、調、横山、原(4)	調、横山(2)	北、調、横山、高橋、森(俊)(5)
5	北、調、横(3)	北、調、横、高橋(4)	北、調、佐野、横
6	北、調、佐、横(4)	北、調、佐、金(3)	北、調、金子(3)
7	北、調、金(3)		
8			
9			
10			北、調、佐、横、筬
11	北、調、佐、横、筬	北、調、佐、横、筬、一	北、調、佐、白方、井口、横、筬
12	北、調、横	北、調	影、北、調
13		影、北、調	（影、北、調、佐）北
14	影、北、調、佐、一ノ瀬		
15			
16			
17			
18			
19			
20			

長崎医科大学戦災復興記録

【昭和二十年八月九日】

午前七時空襲警報発令、九時解除、警戒警報に入る。午前十一時原子爆弾炸裂、松山町上空五百米。瞬時に倒壊。炎上。職員、学生、患者等死傷す。角尾学長以下負傷者は穴弘法の丘に上り、比較的健康者は金比羅山を越して西山方面に逃る。丘の上に止まるもの無慮三百、基礎教室員はグラウンドを越えて浦上天主堂、山里国民学校方面へ逃がる。高木教授は重傷でありながら天主堂下の川辺にたほれ、学生に負はれて午後三時頃穴弘法の丘に来らる。胸内苦悶頻りなり。古屋野教授（微傷）は山を越えて西山へ、長谷川教授（重傷）は山を越えて自宅へ。永井助教授（微傷）は部下と共に丘に止まる。木戸助教授（微傷）は山を越ゆ。祖父江教授（薬理、微傷）は穴弘法下の畠に居るを調が助けて学生の「たむろ」へ連れ行く。石崎助教授は顔面、両腕火傷ひどく、這いながら丘に上り面相全く異り虫の息なり。調、筬島助教授等は健在。薬専の清木教授は腰を打たれ木を杖に裸にて丘へ来る。一ノ瀬助教授も健在にて衛生材料を持ち来り学長等を治療す。江上助教授（耳鼻）は道尾に居たる由にて薬局の川本君と共に治療薬品を携え、来援。村山婦長（顔面火傷）、光島婦長（上肢骨折）等も丘にて一泊す。丘に上りたるものは其侭丘の上或は谷間にて一泊す。互に助け合ひ、はげまし合ふのみにて何のなす所も知らず。学部四年の安東君が倒壊民家より米、鍋を発見。家人の了解を得てたき出しをやる。白米の御飯にて美味。余等はこれを「ビスケット」入れのボール箱に入れて各負傷者に分配す。学長もおいしく一つ食せらる。永井助教授は部下を従へ「がけ」に木を横（よこた）へ其下に藁をしきて露営の場所を設営す。余も其處にて一泊す。

夜中敵機飛来、爆弾のようなものを投下す。被害なし。未だ火災止まず。

角尾学長の収容されたのは矢張り調理所裏の横穴で、古屋野教授を呼びにやられたものと思う。

【八月十日】

角尾学長及高木教授を担架にて丘より下し、調理所裏へ運ぶ。横穴へ入れ、高木教授には葡萄糖の注射を施す。又之を飲ます。古屋野教授は又来学。外科裏の横穴の所にあり（古屋野教授が外科裏の横穴の所に居られたのは、そこに収容されていた石崎助教授を見舞って居られたのだと思う）。其由を角尾学長に告げると之を呼ばせ、大学の後事を話し、学長代理として統率する様頼みあり。

直ちに調理所裏に机を一脚持ち来り大学本部を作る。金子教授が本原方面に避難せる報あり。学生を案内させ偶々来援せる有家町の警防団員を派遣す。見当らず他の警防団員には死体の収容、負傷者を谷間の日陰に集めることを命ず。池田教授が山里国民学校附近に避難、重傷なる由を聞く。佐藤（調理係長）が焼け残りの米をたき出す。

精神科下の横穴より重傷の山根教授を発見、手当を行ふ。後に外科裏（調理所裏？）の横穴に連れ来り、学長、高木教授等と一緒にす。調は基礎教室方面を視察。山木事務官の死体を発見。国房教授らしき死体も発見。其他屍体塁々として惨状限りなし。運動場にも看護婦らしき死体数個あり。物療の施君が来てレントゲン所属の看護婦なりと

名前迄述ぶ。調は其后単身西浦上の滑石郷なる疎開先へ帰る。

【八月十一日】

大学本部を調外科と南講堂との中間に移す。後調外科一階を掃除して之に移る。

調は道尾方面に救護所を交渉し来り。角尾学長、山根教授、其他学生、看護婦の負傷者を収容したしと古屋野教授へ申出許可を得。角尾学長の繃帯交換をなす。今日は元気なり。外科裏の横穴には、角尾学長、高木教授、山根教授、石崎助教授等横わる。高木教授容態悪化し、夕方（午后七時頃）死去さる。

午后三時頃学部四年の松瀬君が内藤勝利教授の死体を産婦人科病棟廊下にて発見す。余と荒木（格）君と松瀬と三人にて行き之を確認。古屋野教授に報告す。四年生の尾立君は生死調査に努力す。この夕、祖父江教授を担架にて、佐野教授宅に運びし由、午后二時頃、国房教授が難を逃れて皮膚科地下室に収容されし由を聞き見舞ふ。熱40℃位ある由、夫人が看護中。池田教授、金子教授の行方不明の由。

(166)

【八月十二日】

夜に入り、角尾学長、山根教授、学生、看護婦等十数名が岩屋クラブに運搬され来る。

(167)

（編集者の判断で日誌にはない見出しを適宜設けてわかりやすくした。）

あとがき

平成7年6月23日、調　来助教授のお孫さんである第一内科の調漸先生に案内されて、資料センターの三根真理子講師と相川は、本原の今なお「調　来助」の表札の掛かるお宅へ純子令夫人とお子様の朝子様、惇子様をお尋ねした。

古いアルバムの写真を資料展の為にお借りし、調先生の小さい手帳を見せていただいた。手帳は原爆前日まで毎日簡単な記載があるもので忘れな草に一度お載せになっている。「別に日誌があるはずですが」と申し上げると、改めてお捜しになり、調　漸先生が「あった、あった」と言いながら、分厚い表紙の簿記用の補助帳を持って来られた。右上に頁を示す数字が押され、98頁までぎっしりと達筆なペン書きであり、50年経っても全く退色せず読みやすい。緒言に昭和20年8月13日に起稿と記載されている。25頁から50頁は当時空白としておかれたもので25年後に加筆されたものである。51頁からは9月26日から10月26日まで毎日大村海軍病院での出来事が図を多用されて記載されている。「追憶」や「忘れな草」の内容よりはるかに詳しく克明に書かれていた。

皆大喜びでなつかしそうに日誌を見ておられる。「おあずかりできましょうか」と申しあげると「父は学部4年のとき関東大震災を経験し、東京大学の近藤外科の救護所で働いたのでそのときの体験が原爆の時に役に立ったと申しておりました」と話される。記録をすぐにでも残そうとなさったのも、御次男のお骨捜しを後回しにして滑石救護所を作り組織的に運営されたのもまさに震災の経験を活かされたのである。「家族としては公的なお仕事が優先され私的なことが後回しになる事に不満もあったのです」と話され、「これは公的に残そうと思って書いたものでしょうから大学にお持ちになって結構です」とおっしゃって下さった。御長男のお亡くなりになる様子や、原爆投下後20日も経ってから御次男の遺骨を徹底的に捜された事の書かれている頁をみて、よくもあのような精力的な病人救護の為の働きが、内なる悲しみを乗り越えておできになったものだと、調　教授の生きざまに感動で胸が打ちふるえる思いであった。ぜひ復刻して広く読んでいただこうとその時思った。

原爆復興50周年の記念誌として作る「忘れえぬ日」に全内容を盛り込もうと思ったが、あまりにも頁数が多いので諦め、「追憶」や「忘れな草」の日誌が簡略でまとまっておりそれを代わりに用いた。別個に復刻版を作って調教授の貴重な体験を後世に残しておく事は原爆復興50周年記念事業の趣意に合うと判断されるので急遽復刻委員会を作り事業の一つに新たに加える事にした。

調　来助教授の日誌は平成7年8月9日の原爆慰霊祭で調　亟治、朝子ご夫妻から長瀧重信医学部長に正式に譲渡され、永井　隆助教授の原子爆弾救護報告とともに長崎大学医学部原爆被災学術資料センターに大切に保存される。

平成7年7月24日

（相川　忠臣　記）

長崎大学医学部原爆復興50周年医学同窓記念事業会
調教授原爆被災復興日誌復刻委員会
内藤　達郎、池田　高良、相川　忠臣、岸川　正大、三根真理子、
調　漸

調　来助教授　原爆関連主要文献

長崎原爆体験―医師の証言―
　調来助・吉澤康雄著　東京大学出版会
　昭和57年11月
長崎―爆心地復元の記録―
　調来助編　日本放送出版協会
　昭和47年８月
長崎原爆被災―医師の日誌
　調来助
　「世界」昭和54年８月号　264―279頁、９月号　278―296頁、
　　10月号　276―294頁
私の原爆体験と原爆障害の大要
　調来助著　大同印刷
　昭和61年５月
忘れな草　第１号　―原爆思い出の手記集―
　旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会編　昭和43年４月
忘れな草　第２号
　旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会編　昭和44年２月
忘れな草　第３号　―原爆思い出の手記と故人の遺稿集―
　旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会編　昭和45年３月
忘れな草　第４号　―原爆思い出の手記と故人の遺稿集―
　旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会編　昭和46年12月
忘れな草　第５号　―原爆思い出の手記集―
　旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会編　昭和49年５月
忘れな草　第６号　―33年忌記念手記集―
　旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会編　昭和52年８月
忘れな草　第７号　―原爆被爆40周年記念―
　旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会編　昭和60年９月
追憶―長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ―
　長崎大学医学部原爆10周年記念出版委員会　昭和30年10月